

图89 IV区1次面出土土器实测图③ (S = 1/4)

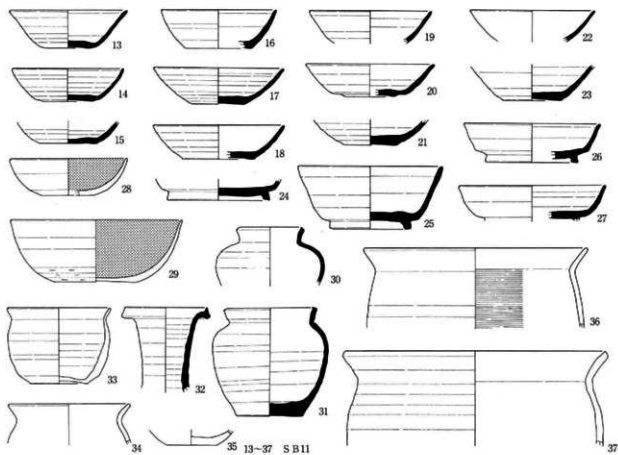
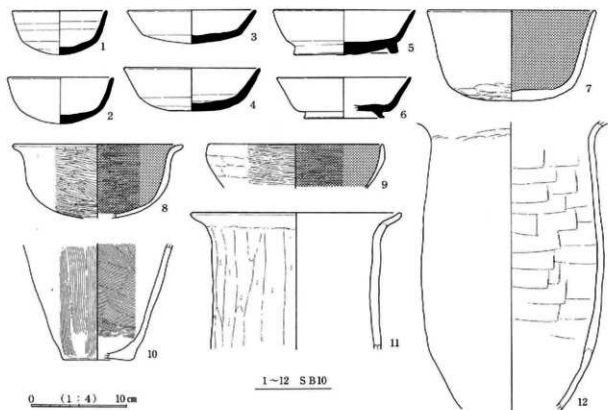


图90 IV区1次面出土土器实测图④ (S = 1 / 4)

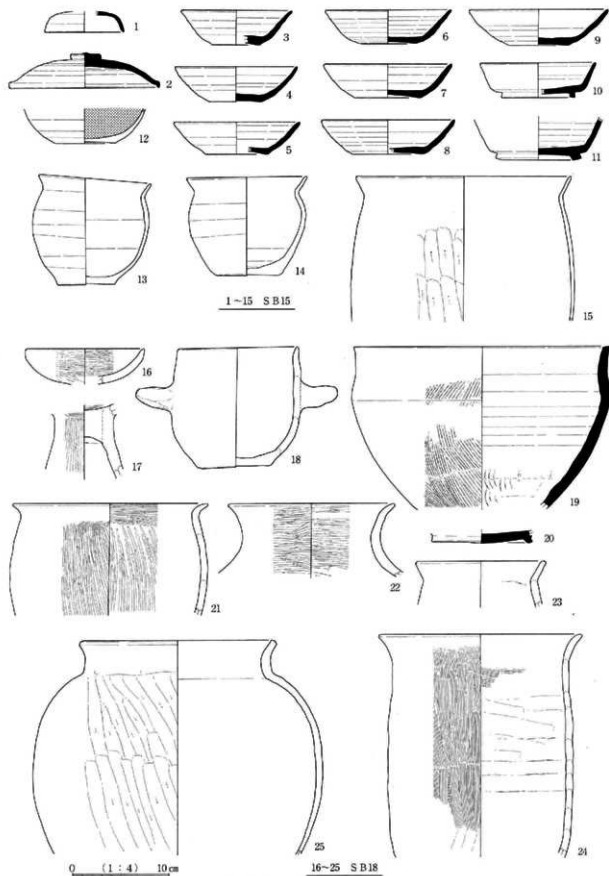


图91 IV区1次面出土土器实测图⑤ (S = 1/4)

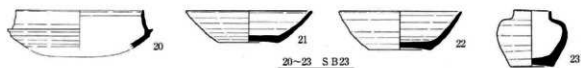
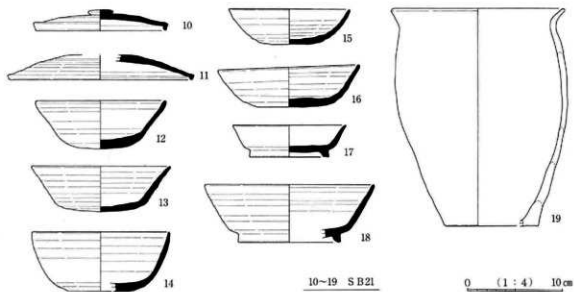
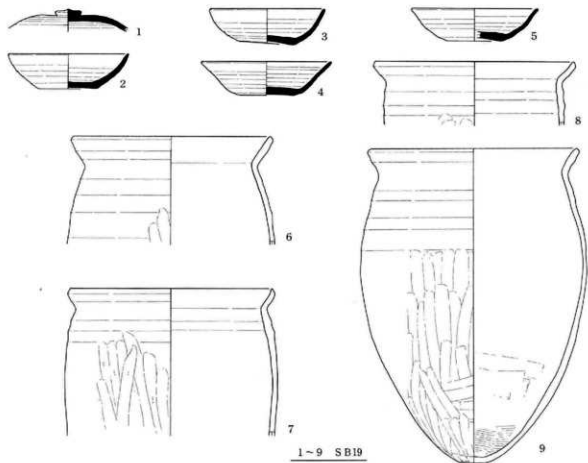


图92 IV区1次面出土土器实测图⑥ (S = 1/4)

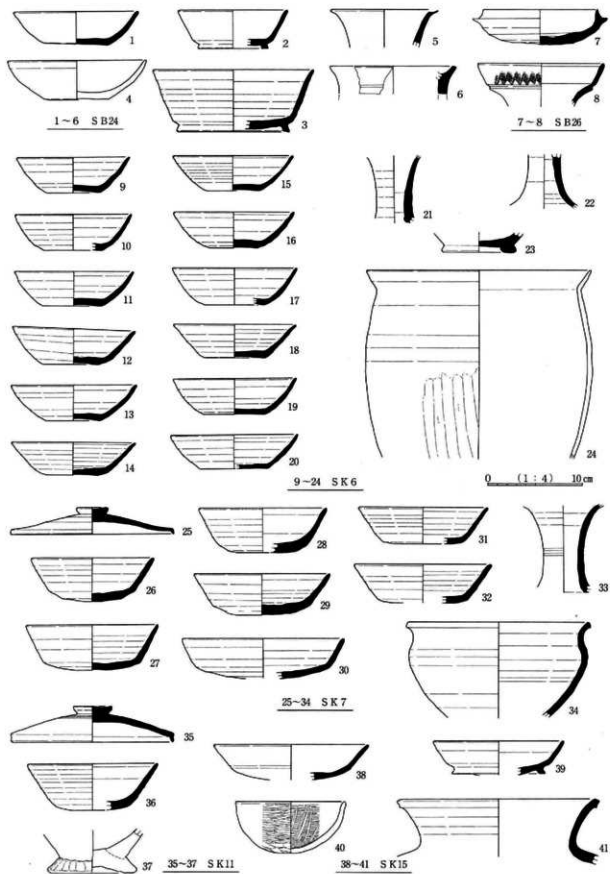


图93 IV区1次面出土土器实测图⑦ (S = 1/4)

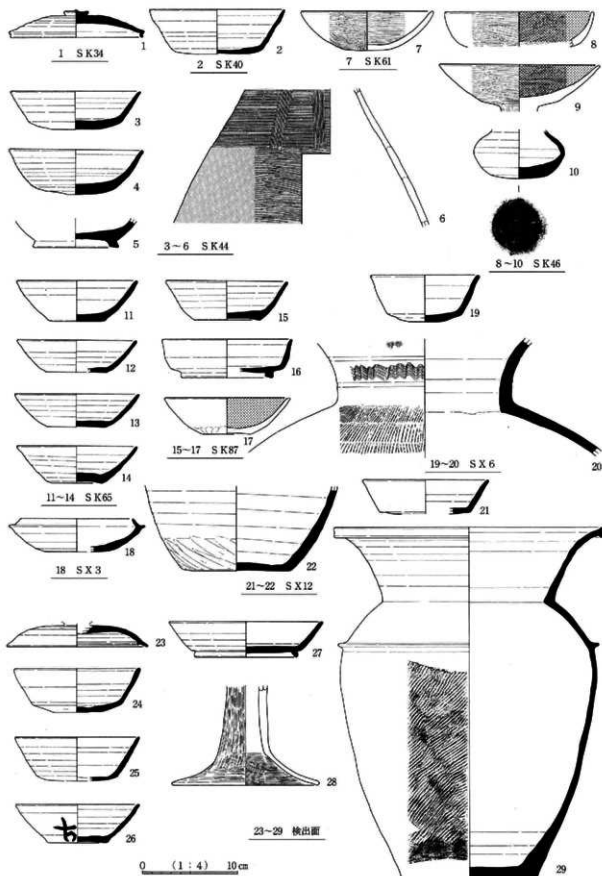


图94 IV区1次面出土土器实测图⑧ (S = 1/4)

## 2 2次面の調査

2次面は弥生時代後期～古墳時代前期に該当し、1次面で遺構プランが不確定であった古墳時代後期～中世の遺構の調査も実施している。

古墳時代前期は西端部で円形周溝墓が2基確認された。それぞれ周溝は独立し、並列して位置する。さらに、周溝墓

西側の壁中より遺物が出土し、調査区外にも周溝墓が存在して墓域を形成した可能性が予測される。隣接する北陸新幹線地点では弥生時代後期の円形周溝墓群が千曲川沿いの南側より造墓が開始され、順次北側へ墓域を拡張していったことが明らかにされている。

本調査区にて検出された2基の円形周溝墓はともに北陸新幹線地点の周溝墓群のさらに北側に当たり、より新しい時期の周溝墓として、一連の墓域を形成するものとの位置づけが可能である。

弥生時代後期は土坑・溝が中心となり、竪穴住居の確認はない。検出遺構数も少なく、V区以西の状況と大きく異なる。後述するように、弥生時代後期集落の東限がV区に求められることより、居住域外に該当すると考えられる。

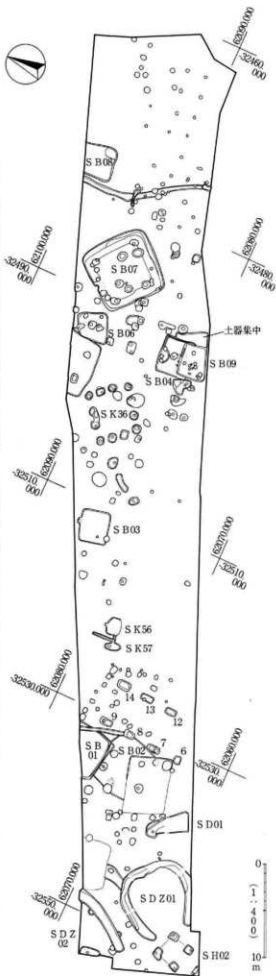
図95 IV区2次面遺構分布図 (S = 1/400)



写真66 IV区2次面全景(東から)



写真67 IV区2次面全景(西から)





調査区	遺構名	時代	調査関係		発掘(調査)状況	付属施設	発見事項	備考	遺構図 図番号	土器図 図番号	写真 番号
			発掘	調査							
Ⅱ 2次面	調査区 西壁内	弥生後～ 古墳前			柱穴		調査区西壁中「2次埋戻しのレベル」に60示した土器群が一面より集中して出土した。遺構群別は把握できないが、土器群は一括資料である。		96 -部分	110	69
Ⅱ 2次面	SDZ 1	古墳前期				築造内土器埋納			96 105	108	70 71 90
Ⅱ 2次面	SDZ 2	弥生後～ 古墳前					埋葬施設の検出なし	西壁一括出土土器群は各群に伴う可能性あり	96	108	90 91
Ⅱ 2次面	SB02	奈良	SD01	焼化面 なし	カマド残欠(北西壁)				97 98	106	88
Ⅱ 2次面	SB01	弥生後期	SD01	灰層 平列			残い不整形土坑 層土は暗褐色粘質土層		97	107	
Ⅱ 1次面	SB14	平安	SB02	船塚 なし	カマド(東壁)		2次面でカマド(大床)確認		97	107	
Ⅱ 2次面	SB01	奈良～平安	SD02	焼化面 なし					98		
Ⅱ 2次面	SD03	奈良～平安	SD01	SK08					98	107	
Ⅱ 2次面	SK13	中世					SK 6～9・12～14で孤立柱建物を確認するか		98	107	89
Ⅱ 2次面	SK56	弥生後期					SK56・57間にトレンチを設け、それぞれ別遺構であることを確認		80 99	107	68
Ⅱ 2次面	SK57	弥生後期							99	108	
Ⅱ 2次面	SB03	奈良	SK22	船塚 なし	カマド残欠(北壁)				100	106	84
Ⅱ 2次面	SB04	古墳～奈良	SB09	船塚(部分的) なし	カマド残欠(西壁)				101		87
Ⅱ 2次面	SB09	奈良	SB04 1面 SB19	焼化面 明確な柱穴なし	カマド残欠(北壁)				101	106	
Ⅱ 2次面	SD09東側 上野壘中	弥生後期	SB04 SB09				盛り込み等不明瞭で 確定されなかった		101 102	109	
Ⅱ 2次面	SK36	弥生後期					瓦葺の土坑群とともに規則的に配置されるが、建物跡か 否かは不明		101	107	
Ⅱ 2次面	SK39	古墳後出陣					60示した三足土器1点 のみ出土		101	107	
Ⅱ 2次面	SKY 1	弥生後期	SB07				SB07遺構によって破壊された遺構残骸か SB07下に同様の弥生土坑が4基あり		102		
Ⅱ 2次面	SB06	奈良か		船塚 なし			北壁に焼土		102		85
Ⅱ 2次面	SB08	平安		船塚 なし			住居跡の可能性高い		103	106	

表12 Ⅱ区2次面主要検出遺構一覧表



写真68 SK56遺物出土状況(1次面検出状況)



写真69 調査区西壁土器出土状況

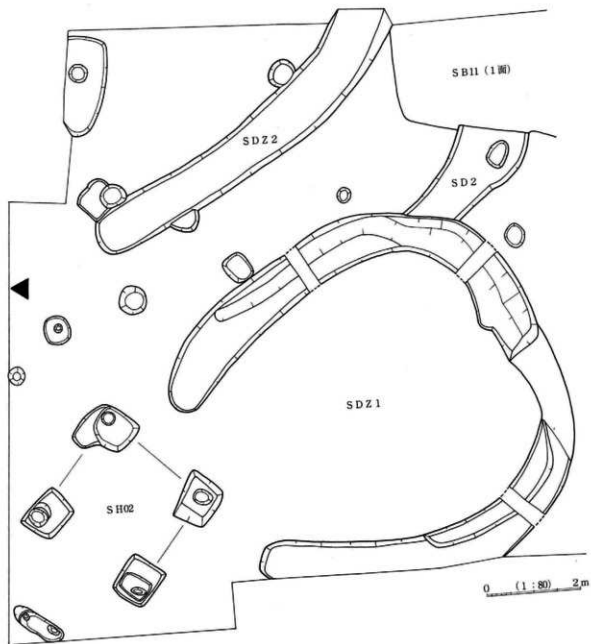


图96 IV区2次面遺構実測図① (S = 1/80)

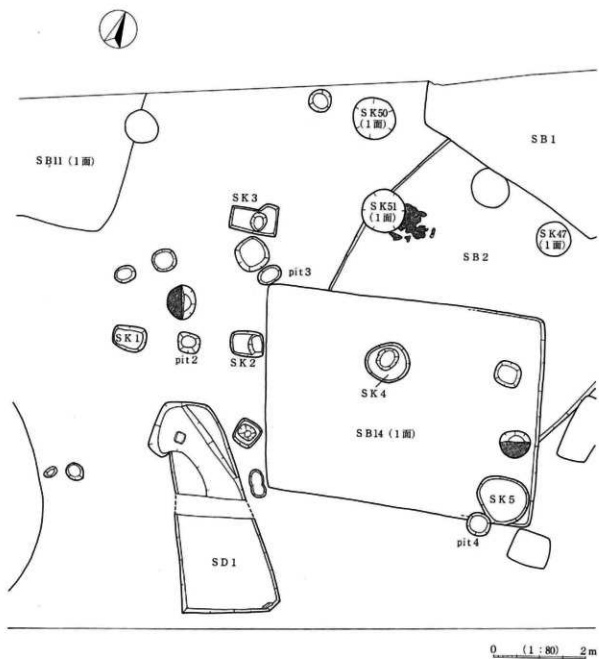


图97 IV区2次面遺構実測図② (S = 1/80)

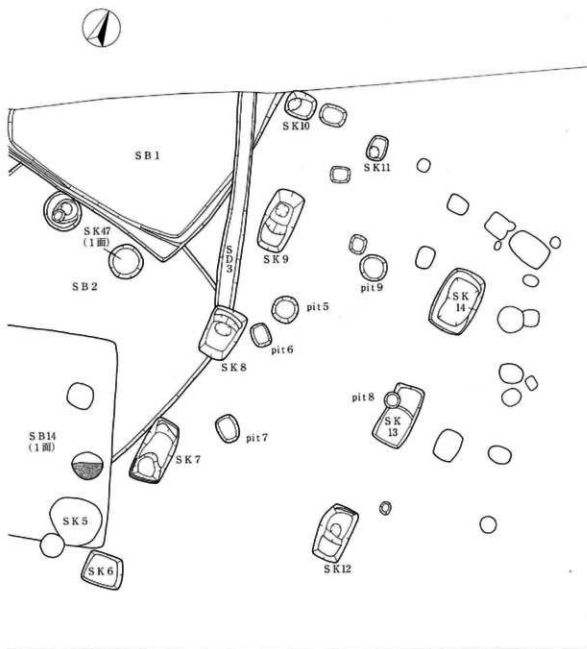


図98 IV区 2次面遺構実測図③ (S = 1/80)

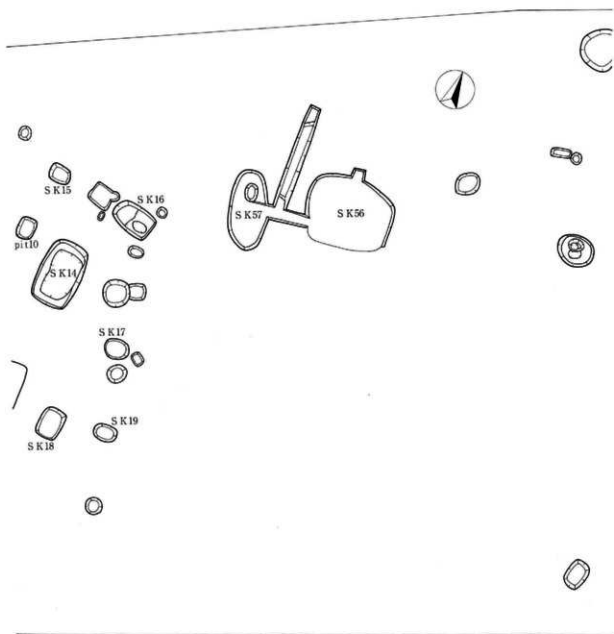


图99 IV区2次面遺構実測図④ (S = 1/80)

0 (1:80) 2m

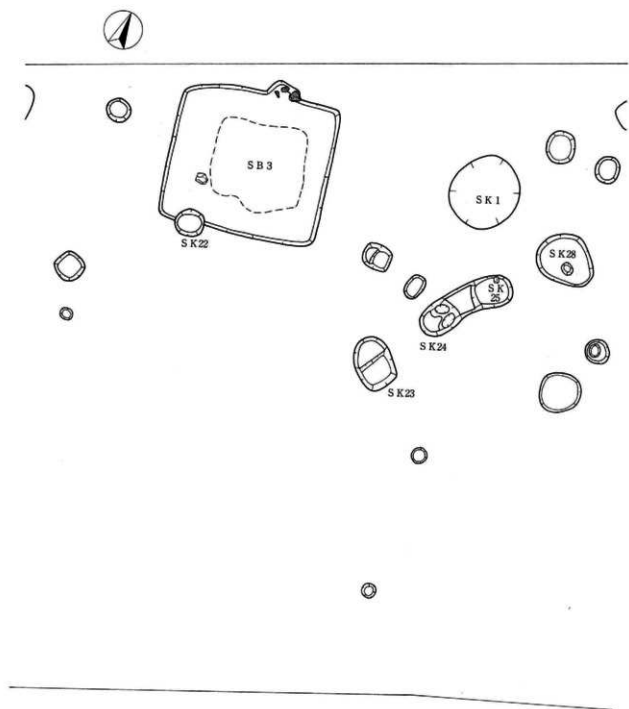


图100 IV区2次面遺構実測図⑤ (S = 1/80)

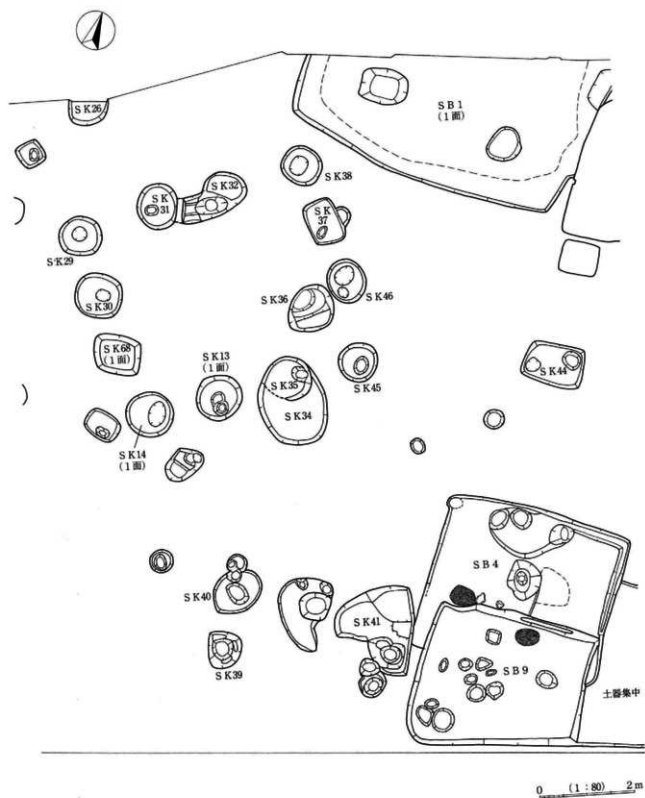


图101 IV区2次面遺構実測图⑥ (S = 1/80)

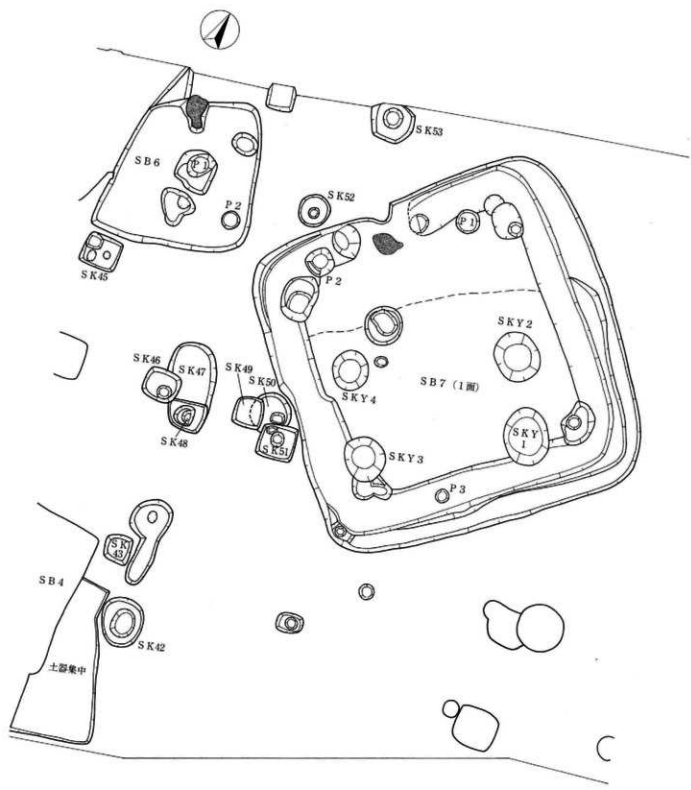


图102 IV区2次面遺構実測図⑦ (S = 1/80)

0 (1:80) 2m



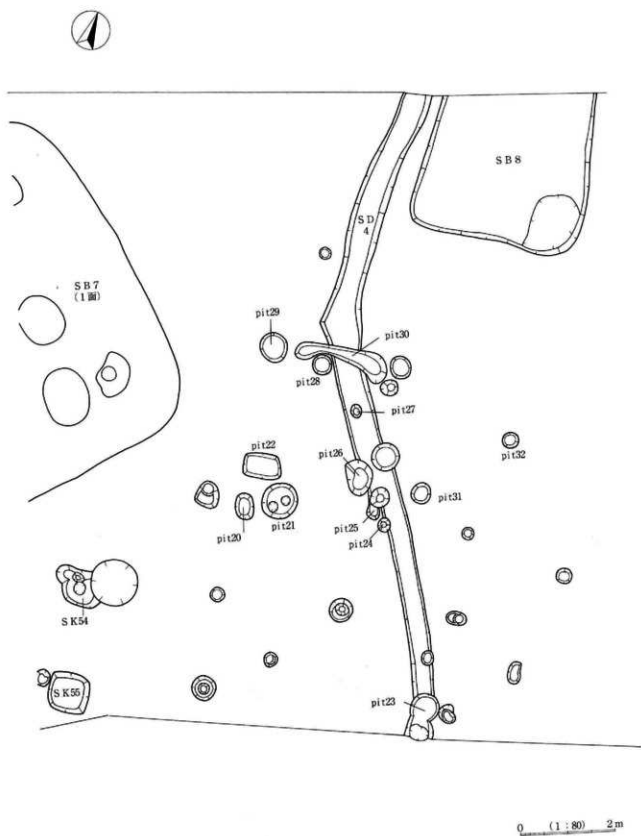


图103 IV区2次面遺構実測図⑥ (S = 1/80)

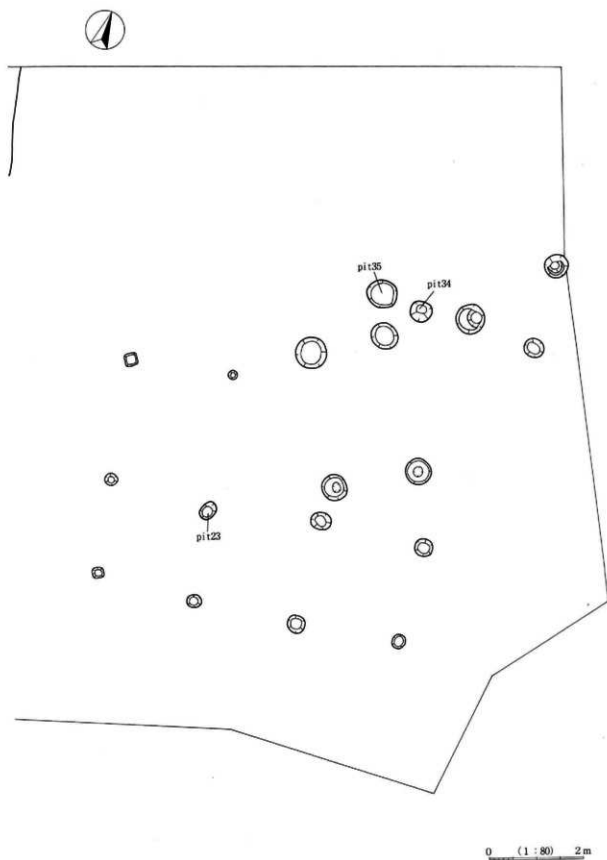


图104 IV区2次面遺構実測图⑨ (S = 1/80)

SDZ01 調査区西端部に検出された円形周溝墓である。墳丘盛土は確認されなかったが、円形に巡る周溝が検出された。直径は周溝外法で約7.5m、周溝内法で6.5×5.7mを測る。周溝外形はほぼ円形を描くが、墳丘部は南北にやや長い楕円形を呈する。南側では周溝が途切れ、ブリッジ部が確認された。北側では周溝の途切れは認められず、ブリッジは1箇所である。ブリッジ幅は周溝端部間で約3.5mを測る。

周溝は幅約1mで断面形態はほぼ逆台形を呈するが、北側では周溝底をさらに掘り込み二段掘り状の形態となる。主軸上に当たる北側周溝ではこの掘り込み内より土器群が検出された。底部穿孔壺3・台付壺1・器台1・鉢1が、周溝内壁際に一列に並んだ状態で出土している。

底部穿孔壺は東側に3点がまとまり、5と7(図108、以下同)は横転、6は底部が潰れていたが正置された状況で出土している。西側からは11の器台と8の鉢が横転して出土した。この両者の位置関係は、器台上に鉢が載せられて周溝底に正置されたものが横転したかのような状況であった。以上の土器群の出土状況からは周溝内への落ち込みとは考えずらく、意図的に配置された可能性が高いと想定される。このほか9と10の鉢は周溝内出土の破片で、墳丘上にも土器群が存在した可能性が考慮される。

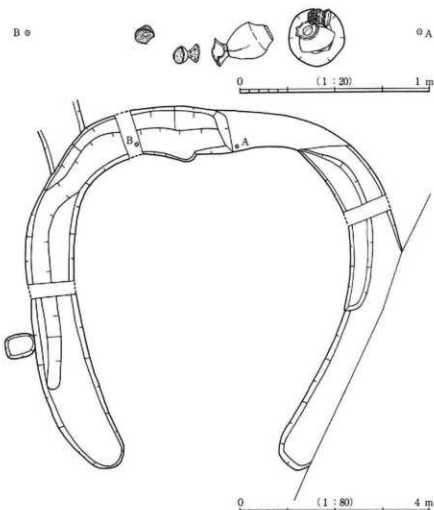


図105 SDZ01周溝内土器群出土状況実測図 (S = 1/80)



写真70 SDZ01全景



写真71 SDZ01周溝内土器出土状況

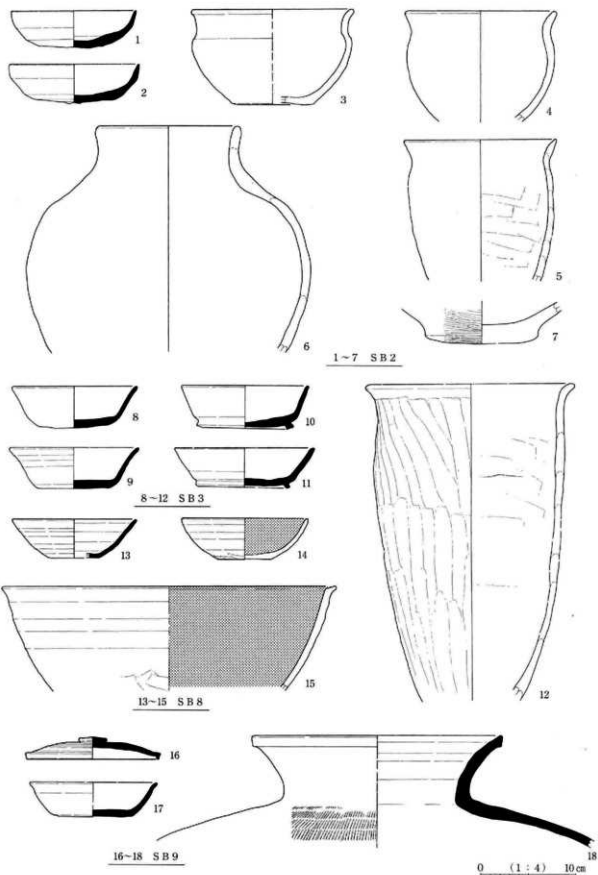


图106 IV区2次面出土土器实测图① (S = 1/4)

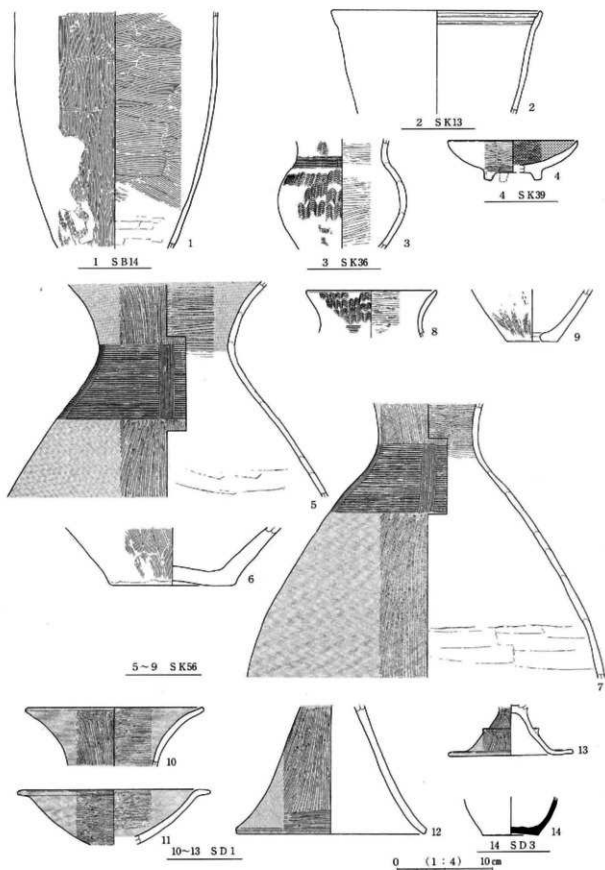
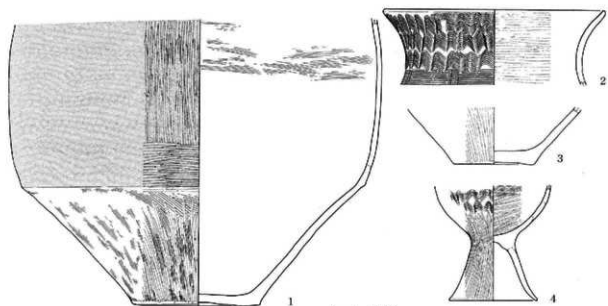
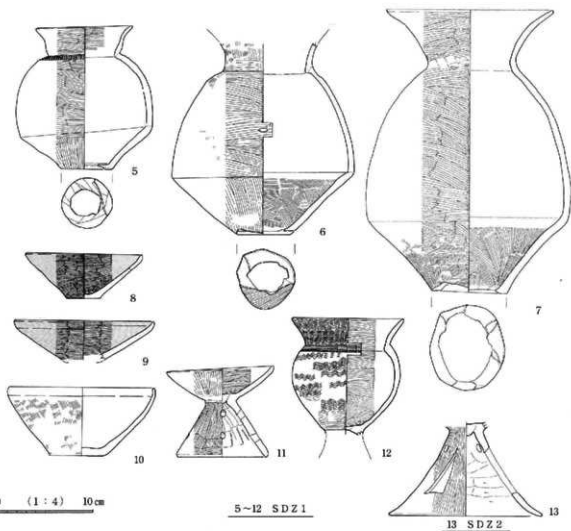


图107 IV区2次面出土土器实测图② (S = 1/4)



1-4 SK57



0 (1:4) 10cm

5-12 SDZ1

13 SDZ2

图108 IV区2次面出土土器实测图③(S=1/4)

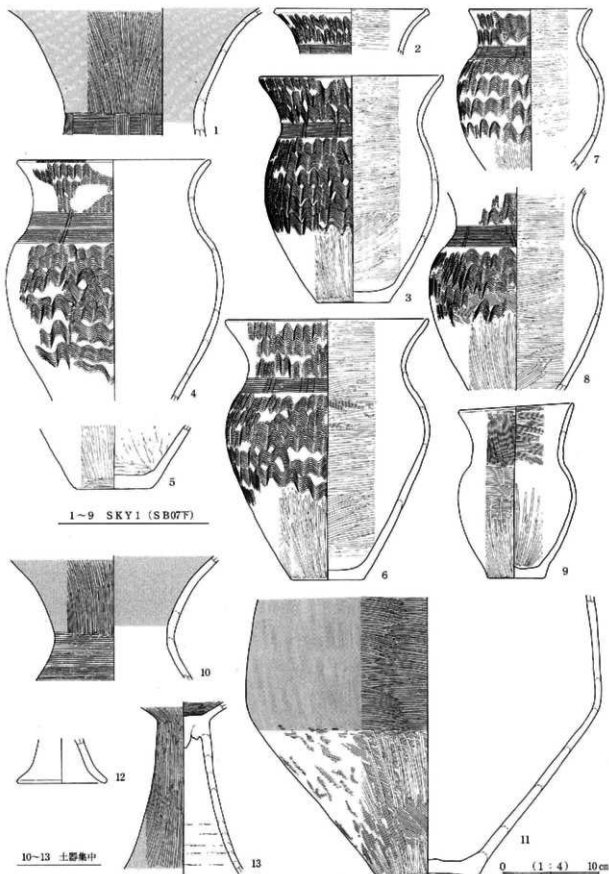


图109 IV区2次面出土土器实测图④ (S = 1/4)

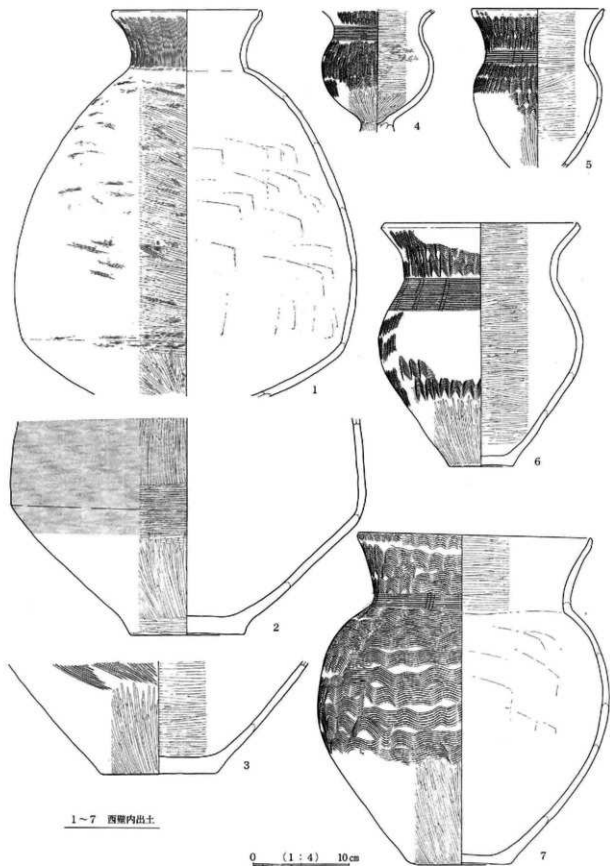


图110 IV区2次面出土土器实测图⑤ (S = 1/4)



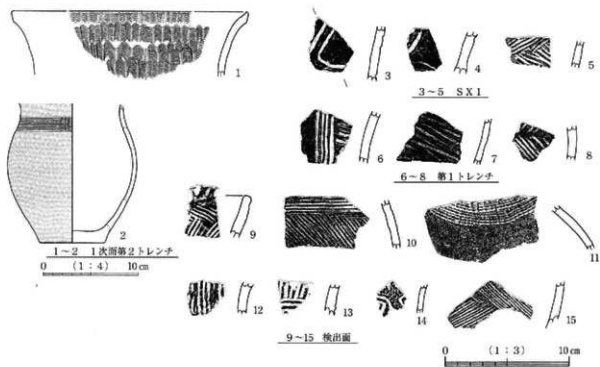


図111 IV区2次面出土土器実測図⑥(実測図:S=1/4 拓影:S=1/3)



写真72 1次面SB14



写真73 1次面SB14床面上焼土遺構



写真74 1次面SB10



写真75 1次面SB05



写真76 1次面SK15

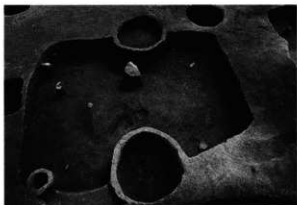


写真77 1次面SK07



写真78 1次面SB17・18



写真79 1次面SB19



写真80 1次面SB21



写真81 1次面SB22



写真82 1次面SB23



写真83 1次面SB24



写真84 2次面S B03



写真85 2次面S B06



写真86 2次面S B07



写真87 2次面S B04



写真88 2次面S B02



写真89 2次面S K06~09・12~14



写真90 2次面S D Z01・02 S H02



写真91 2次面S D Z02

## Ⅷ V区の調査

V区は東側でしなの鉄道軌道によってIV区と分断され、西側で駒長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された北陸新幹線地点と接する。IV区同様に調査区の分割はなく、全面調査を実施した。

### 1 1次面の調査

検出された遺構は5軒の竪穴住居のほか、溝・土坑が検出され、いずれも平安時代に該当する。仁和洪水砂と想定される砂層に埋没した遺構はみられず、いずれも仁和洪水以前の遺構と判断される。

住居の分布状況は2次面にて検出された該期のSB06・07・10と合わせ、調査区全面に広がる。遺構重複はSB01と05、SB06と07においてのみ確認される程度で著しい重複はみられない。簡素な建て替え等は想定しずらく、集落域が面的に広がっていたものと考えられる。

住居はカマドを持つものとカマドを持たないものの二者が認められ、カマドを持つ住居で明確な床面が確認された。カマドの方向はSB01・05・07が北東向き、SB06が東向きで、SB01・06において石材が認められた。特にSB01では火床をコ字形に囲むように石材が確認され、石材を芯材としてカマドを構築したことが確認される。また、調査区中央北寄りで検出された焼土遺構は2次面SB06の煙道に該当する可能性が考えられる。カマドを持たないものについても部分的ながら貼床が確認でき、建物跡である可能性が極めて高い。住居に付随する作業施設等の性格が想定されよう。なお、柱穴はすべての住居において検出されなかった。



写真92 V区1次面全景（東から）



写真93 V区1次面全景（西から）

地名	遺構名	時代	実測箇所		床面	付属施設	特記事項	備考	遺構図 図番号	土器図 図番号	写真 番号
			先	後							
V区 1次面	SB01	平安		SB05	硬化面 なし	石組カマド（北壁）	土器は床面より出土		112	114	94 95
V区 1次面	SB02	平安か			貼床（東側一部） なし				112		96
V区 1次面	SB03	平安か		SD03	貼床（南側一部） なし				112		97
V区 1次面	SB04	平安か			硬化面 なし	煙道（西壁）	カマドに伴う焼土など 検出されず		112	114	98
V区 1次面	SB05	平安	SB01		硬化面 なし	カマド（北壁）	カマド煙道未検出		112	114	99
V区 1次面	SK01	平安		SB04				2次面にて底部確認	112	114	
V区 1次面	SK03	奈良～平安		SB05			底部に灰砂布		112	114	101

表13 V区1次面主要検出遺構一覧表

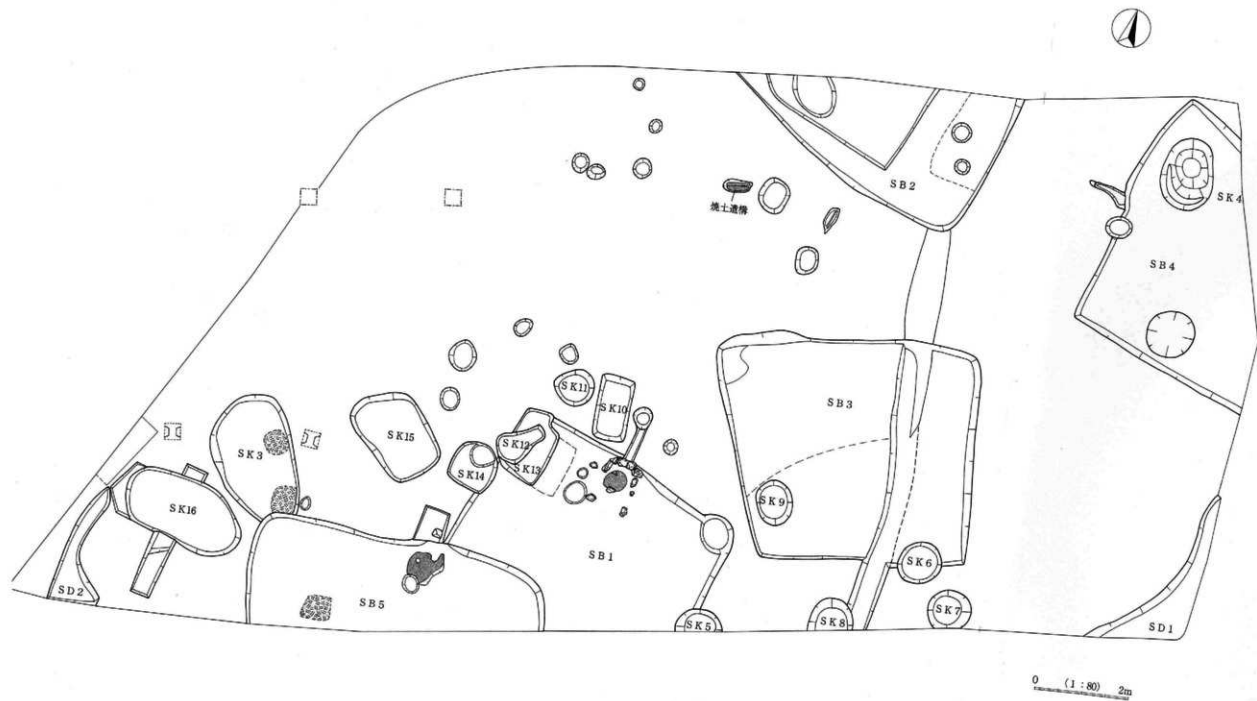


图112 V区1次面遺構実測図 (S=1/80)



写真94 SB01



写真95 SB01カマド



写真96 SB02



写真97 SB03



写真98 SB04



写真99 SB05



写真100 焼土遺構（2次面SB06煙道か）



写真101 SK03とSK16

## 2 2次面の調査

10軒の竪穴住居が検出され、弥生時代後期1軒・古墳時代後期1軒・奈良時代2軒を数え、他は平安時代となる。1・2次面あわせ、平安時代遺構は調査区全面に広がりを見せる。

奈良時代は竪穴住居（SB16）1軒が確認された。平安時代住居に破壊され、カマド等の施設は確認されなかった。古墳時代後期は竪穴住居（SB11）が調査区東端部で検出された。カマドは北西向きで、貼床が確認されたが、柱穴の検出はない。東側約1/2が調査区外となるが出土土器は豊富で、カマド周辺を主に杯・椀・甌・広口壺・甕が出土し、良好な器種構成を示している。弥生時代後期は竪穴住居（SB17）1軒が西側端部付近で検出された。明確な床面・柱穴・炉跡等の生活施設の検出がなく、竪穴住居と判断する根拠は希薄であるが、遺物は床と捉えた面より出土している。この弥生時代後期遺構は西側の新幹線地点やVI区で確認された遺構群と集落域を形成するものと考えられるが、その希薄性は注目される。ここで弥生時代遺構の確認面の標高に着目すると、V区2次面がSB17確認面で354.026m、IV区2次面がSDZ02確認面で352.816mとV区が1m程高く、現在のしなの鉄道軌道付近を境に地形変換があったことがわかる。V区における該期遺構の分布の希薄性はこの地形に制約されたものと捉えられ、篠ノ井遺跡群における弥生時代後期集落の東限を示すものと捉えられよう。

また、古墳時代後期～奈良時代にかけても弥生時代後期同様に分布上の希薄性がみられるが、同時期遺構の広がりは西側隣接のVI区・新幹線地点、東側隣接のIV区で確実に確認され、弥生時代後期に比して東側を主に広範囲に展開する。さらにI～IV区における検出遺構の所属時期が時代の下降につれて東に分布域を広げるという傾向からは、弥生時代後期に集落域の東限と認識されていた微高地形を越えてより東側へ居住域が拡大し始めたのが古墳時代後期と認識される。弥生時代後期以降の断絶を打ち破って出現した該期遺構の存在は、集落域の拡大に伴う新たな開発が着手されたことを示すと考えられる。



写真102 V区2次面全景（西から）

検出区	遺構名	時代	遺構関係		床面 柱穴	付属施設	特記事項	備考	遺構ID 検出番号	土器ID 検出番号	写真 番号
			先	後							
V区 2次面	SB06	平安	SB07・08		貼床	カマド（東壁）		1次面後土遺構が豊富となる可能性が高い	113	114	103 100
					I（P2）						
VI区 2次面	SB07	奈良～平安	SB08	SB06	貼床	カマド（北壁）			113		104
					なし						
V区 2次面	SB10	奈良～平安				カマド（南東壁）	隅部のみ検出		113		
V区 2次面	SB11	古墳後期		SK01	貼床	カマド（北壁） 壁溝	土器は床面より出土	113	115	107 108 109 110	
					なし						
V区 2次面	SB14	平安小				カマド（北壁側部）		113		105	
V区 2次面	SB16	奈良	SB17	SB06・07	貼床			113	114		
					I						
V区 2次面	SB17	弥生後期		SB08	貼床		土器は床面より出土	113	114	106	
					なし						

表14 V区2次面主要検出遺構一覧表

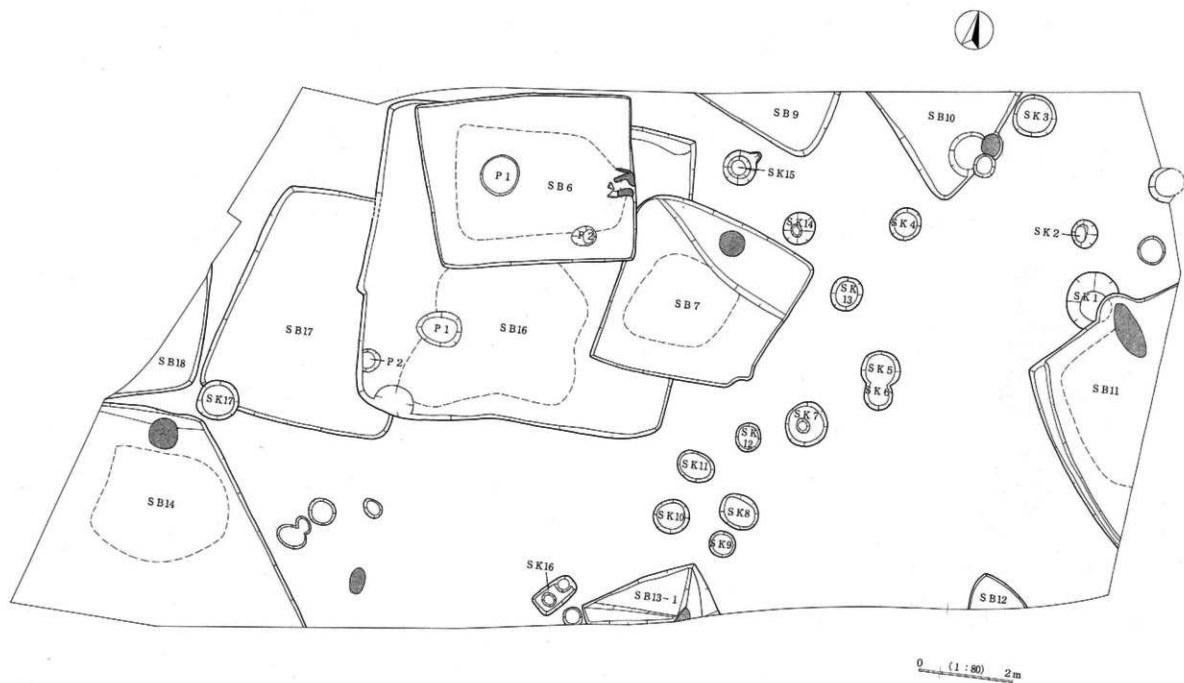


图113 V区2次面遗物实测图 (S=1/80)





写真103 SB06



写真104 SB07



写真105 SB14



写真106 SB17



写真107 SB11



写真108 SB11



写真109 SB11焼土上遺物出土状況



写真110 SB11床面上遺物出土状況

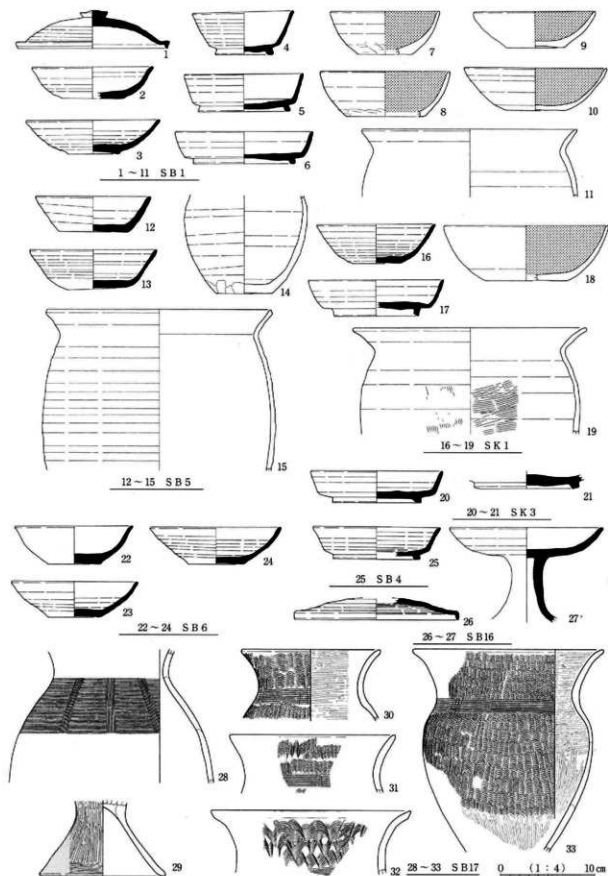


图114 V区1·2次面出土土器实测图(S=1/4)

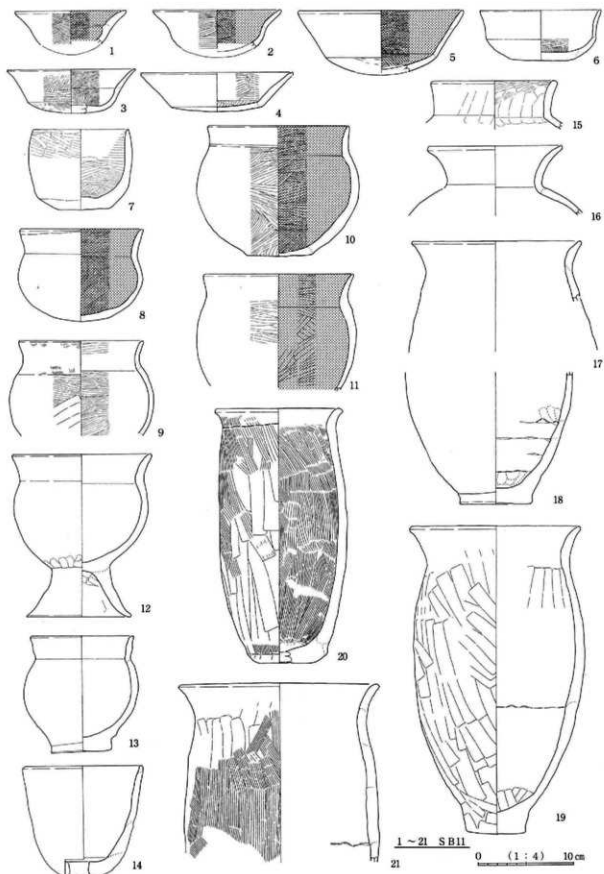


图115 V区2次面出土土器实测图 (S = 1/4)

## IX VI区の調査

VI区は北陸新幹線建設用道路により南北に2分割(N・S区)し、調査区内を縦断する水道管保護のために東西に2分割(1・2区)した。さらにS区では隣接地への出入口確保のため、細分割(2・3区)し、都合5地点に分けて発掘調査を実施した。各地点ともに1・2次面調査を実施し、S-3地点のみ3次面を設定している。この各調査面は間に堆積土を挟まず、上面遺構底部直下に連続する。このため、時代に対応した調査面というよりは下層遺構調査のために上層遺構を除去したという作業上の確認面である。この点において、IV区以东地域とは異なり、地形形成に伴う土壌堆積の違いを示すと考えられる。

### 1 1次面の調査

古墳時代後期から平安時代を主体とする。また、S-2地点を中心に弥生時代後期遺構も確認された。

**方形ピット群** S-3地点では南北ならびに東西方向に列をなした方形の小型ピット群が検出された。覆土はいずれも黄褐色砂質土の単一層であった。出土遺物は下層に遺構が存在する場合のみみられ、直接伴うと判断される事例はない。このため時期の特定は難しいが、検出されたすべての遺構を掘り込んで、最も新しい時期の所産と考えられる。なお、S-3地点以外でも部分的に分布は確認され、本来は全面に展開していたと考えられる。

**中世** 明確な中世遺構は存在しないが、円形・素掘の井戸群の大半は該期に属する可能性が高いと判断される。

**平安時代** 竪穴住居・溝・土坑等が検出されている。竪穴住居は11軒程度が調査区を横断するN-2地点SD10・11、S-2地点SD01以东地域に遺構間の重複がほとんどみられない散発的な状況で展開する。東側の北陸新幹線地点やV区と同様なあり方で、一連の集落域を形成すると捉えられる。出土遺物では、検出面より数点出土した瓦塔片が特筆される。いずれも小片で、破片間の接合などは認められない。南東側に隣接する北陸新幹線地点からは瓦塔が2個体出土しており、同一個体の可能性も想起される。

**奈良時代** 検出遺構数が多く、弥生時代とならんで本地区の中心的時代となる。特に調査区東側(S-1・N-1区)での遺構密集度が高い。東側に隣接する北陸新幹線地点北側調査区の密集度に通じ、北陸新幹線地点南側・IV・V区での散発的な分布状況とは対比的で際立つ。該期遺構の分布の中心が本地点から北東側にかけて存在することが確実視できよう。竪穴住居のカマド方向は北・西・東と様々である。特に事例が少ない東向きがみられる点は、細別時期の比較検討をととして集落構造を把握するうえで見逃せない。



写真111 S-3地点方形ピット群



写真112 N-1地点S B35

N-1区SB35は不整形の土坑であるが、土坑内に堆積した砂層中より2点の甎仏と埴輪片が出土した。これら遺物が出土した砂層は仁和洪水砂との間に間層を挟み、仁和洪水以前に形成されたことが確実である。遺跡全体を覆うほどではないが、小規模洪水等が発生していたことを示唆しよう。甎仏は2点出土し、同范品である。また、埴輪は底部片を含む小破片が数点出土している。これら遺物の概要については後述するが、自然堆積ではみられない砂層中出土ということから、近隣に埴輪を樹立した古墳や甎仏を使用した仏教関連遺構の存在を示唆し、注目される。特に甎仏に関しては検出面出土の瓦塔片や新幹線地点出土の甎仏・瓦塔と合わせ、仏教関連遺物の集中が認められ、村落内寺院等との関わりで注意される。

**古墳時代後期** N-2区・S-3区で竪穴住居が5軒、N-1区で井戸1基が検出されている。分布状況は希薄で、新幹線地点での全面展開とは大きく異なる。N-2区SB50は一辺7.3mを測る竪穴住居で、群を抜いて大きい。床面上には多量の炭の散布が認められ、性格が他と異なる可能性が想起される。

**弥生時代後期** S-2地点を中心に竪穴住居・土坑が検出された。後出遺構の重複が少ない地点で検出され、さらに2次面で新たな遺構の検出がなかったことから、一括して2次面に取り扱うこととする。

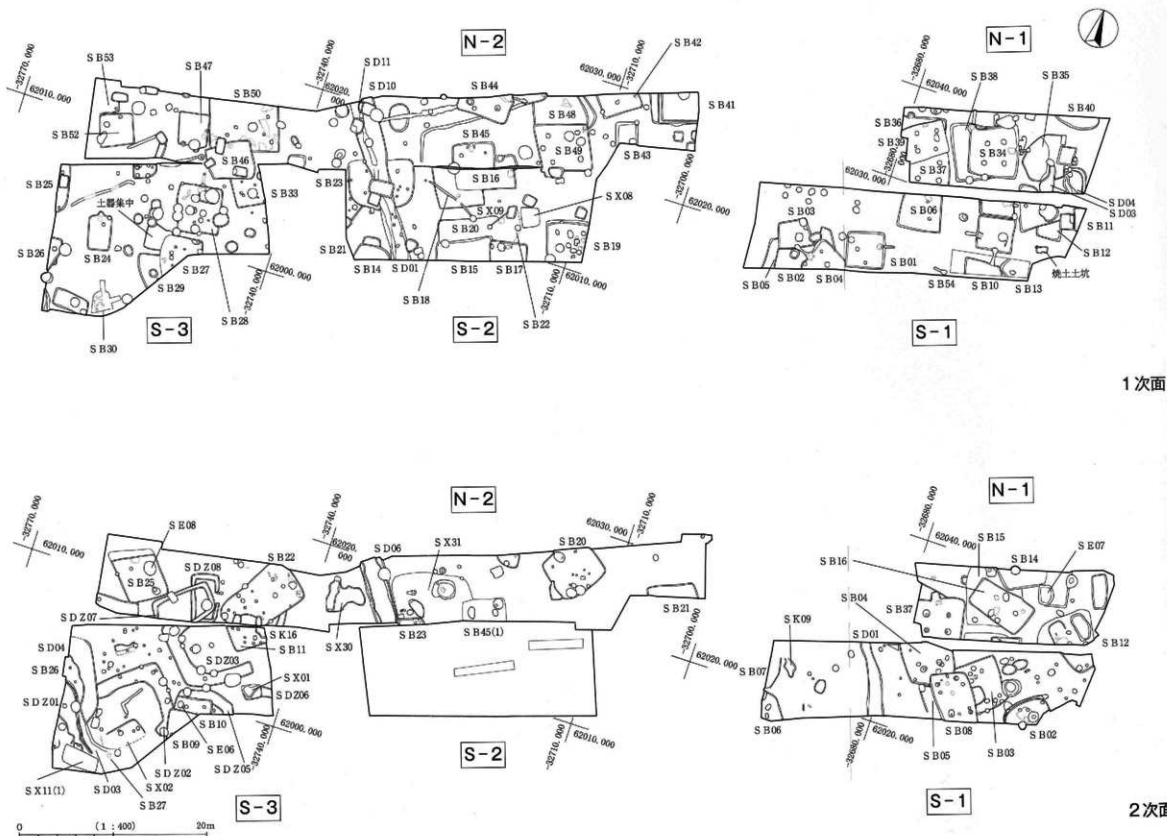


図116 VI区1・2次面遺構分布図(S=1/400)

拠点名	遺構名	時代	遺構規模		築(次)前 層状況	付属施設	埋込状況	調査	調査年度 調査号	土器目 録番号	写真 番号
			元	末							
S-3	SB24	奈良中			礎石部 なし	カマド火床(北壁)			117		126
S-3	SB26	古墳後期		SB26	敷石 1				117	132	
S-3	SB27	奈良	SB29 土器集中		礎石 明確な柱穴なし	西壁側に土土 (カマド残欠か)			117	135	127
S-3	SB28	奈良		SE(前期) SX12 SK31-32	礎石 なし	カマド(北壁)	礎上に敷石有	基礎する母戸はSE 8-10- 12-16の8基	117 118 119		135
S-3	SB29	奈良後期		SB27	敷石 なし				117	135	
S-3	SB30	不明			礎化層 なし		礎上と礎が敷石、住居跡の可能性が想定されたが、 礎上が不明瞭でプラン把握は不十分		117		
S-3	土器集中	奈良後期		SB27	敷石 なし		不整方向の浅い掘り み穴より土器出土	黄褐色砂層上より土器出土	117	145	
N-2	SB47	奈良-平安		SB27	礎石 なし	カマド火床(東壁)	土玉出土		118		
N-2	SB52	奈良-古墳		SK67	敷石 なし			住居とする構造的根拠は希薄	118	138	
N-2	Pn53		SB53				SB53を礎裏に掘り込む	SB53 6住居とする根拠は希薄	118	139	
N-2	SB46	奈良	SB33-50	SK57 SX13-19	礎石 なし	カマド(大床 北壁)		S-3区ではSB32と同一住居 SB46に統一した	119	137	
N-2	SB50	古墳後期		SB46 SK50 SK39 SX19	礎石 2		床面上に礎多数散在 F瓦2点出土		119	137	121
N-2	SK60	奈良-古墳		SB50					119	138	
S-3	SB23	奈良以前		SB46 SB13	礎化層 なし		床面直上より黄褐色土 土		119		
S-3	SB39	奈良以降	SB28 SK31		平坦	基層	出土遺物は瓦人と判別 される	確実なし	119	139	
N-2	SK35	奈良後期		SD10・11 SK17					120	139	
N-2	SD10	奈良以降	SD11	SK17 SE21 SX18 SD12			S-2地点SD01と同一遺 構		120		
S-2	SD01	奈良以降	SB23	SK30 SX02-05			N-2 地点SD10と同一 遺構		120		
S-2	SB23	奈良後期		SB21 SD01 SX02-05	敷石 6		黄化材・焼土・瓦が床 面に広く分布		120	134	125
S-2	SB14	奈良後期	SB21	SX09	敷石 なし				120	131	
S-2	SB21	奈良後期	SB23	SB14 SD01	敷石 なし		西壁と北壁の一部をSD 23で確認		120	132	
N-2	SB14	古墳後期	SB51	SD06-07	礎石 2	カマド残欠(東壁)			121	137	
N-2	SB15	平安	SK70	(SB16)	礎石 なし	カマド(北壁)	北東隅部に床面と同層 を挟んで礎と瓦が互層 をなして埋積	S-2地点ではSB16床面直下 に存在したと想定されるが、 確認できなかった	121	138	130
S-2	SB16	平安	SB18 SK70	SB04	礎石 2	カマド火床(東壁)		N-2地点ではSB46の調査に より、確認できなかった	121	131	
S-2	SB22	奈良	SK20 SX08	SB17 SK22	礎石 1	カマド火床(北西壁)		SB15-20の調査過程で確認 されたため、プラン把握が 不十分	121 122		132

地区名	事業者	宅名	調査履歴		調査(1)要 件状況	調査項目	検査項目	検査	調査結果 検査番号	工費 調査番号	その他 備考
			高	低							
S-2	SB18	養生後期		SB16	硬化面 なし	貯			121	131	
S-2	SB15	養生後期	SK20・22 SK03	SB17	底層 なし				121	131	
S-2	SK20	養生後期		SB15・22	底層 なし				121	133 134	
S-2	SK09	養生後期					覆土中より多量の土器 出土	SK16とSK20の間	121	144 145	
N-2	SB48	古墳～奈良	SK51 SK09	SB49	陥床 なし	カマド穴(北壁) 掘削に致敷布	北壁の焼出しは不充分		122	138	
N-2	SB49	平安	SB48	SK20 SK04	陥床 4	北東隅部に焼土と炭 (カマド残欠か)	白玉3点出土		122	138	
N-2	SK38	跡地～ 古墳跡							122	139	
S-2	SB17	平安	SB15・22		陥床 なし	カマド(北壁) カマド脇に土坑			121 122	130	
S-2	SB19	奈良		SK21	硬化面 2		水晶製印子玉出土	棟面上に焼土と炭が散見し ているが、カマド等との関 係は不明	122	132	134
S-2	SK21	平安	SB19		平掘				122	139	
S-2	SK34	古墳跡 ～奈良							122	139	
S-2	SK08	養生後期		SK22			覆土中より多量の土器 出土	土器類納坑	122 128	140 129	128 129
N-2	SB41	奈良～平安		SB19	陥跡 なし		白玉5点出土		123	136	
N-2	SB42	不明			陥床 なし	カマド穴(東壁)			123		
N-2	SB43	不明			陥跡 なし		埋設部は高く、奈良時 代以降である可能性が 高い	住居の可能性低い	123		
S-1	SK02	奈良～平安	SK03	SK04	陥跡 なし				124		
S-1	SK03	奈良	SK06	SK02・04 SK04・06	陥床 なし				124	129	
S-1	SK04	(奈良～) 平安	SK02・06 (SK01)		硬化面 1	カマド(北西壁)	保護発掘部に石材	SK01との重複発掘は埋設の ため充分でないが、SK01に 先行と判断	124	129	123
S-1	SK06	不明		SK02・04	陥跡 なし			重複状況からは奈良時代以 前	134		
N-1	SK36	奈良		SK39	陥床 赤焼出し	カマド残欠(北壁)		SK37との前後関係は不明	125	137	119
N-1	SK37	奈良		SK39	陥床 3			SK36との重複関係は不明	125 126	137	119
N-1	SK39	平安	SK36・37		陥床 4	カマド残欠(北壁) 焼土は検出されず	白玉2点出土		125	136	119
S-1	SK01	奈良		SK03 (SK04)	陥床 2	カマド(東壁)		SK04との重複発掘は埋設の ため充分でないが、SK01に 先行と判断	125	129	
S-1	SK06	奈良～平安			陥床 なし	カマド残欠(北壁)	佛土器土人 骨遺物検出は不明	SK37との前後関係は不明	125	129	
S-1	SK13	奈良～平安							125	139	
N-1	SK34	奈良	SK35 SK38	SK45・47	陥床 4	カマド(東壁)	北壁外側に壁礎が確認され、本住居に破壊された住 居が存在した可能性が高い		126	135	118
N-1	SK38	奈良		SK34 SK47・48	陥床 なし	カマド(北壁)		構造は長く、先溝部は調査 区外まで見ゆる	126	135	118
S-1	SK07	平安			硬化面 なし	カマド(東壁) 石材あり	N-1区では検出されず、N-1区まで及ばない小居住 跡と考えられる		126	129	
S-1	SK09	奈良		SK10	硬化面 なし	カマド(西壁) 紅志燻炭	カマド直前のみ陥床状 の硬化面が確認された		126	130	122
S-1	SK10	平安		SK09	陥床 なし	カマド穴 (北壁東隅部)			126	129	
S-1	SK13	奈良			陥跡 なし			住居の可能性は低い	126 127	129	

地点名	遺構名	時代	重複調査		種(造)別	付属施設	付記事項	備考	遺構目録番号	土器目録番号	写真番号
			北	南							
S-1	SB54	不明					標置のみが検出され、調査区外に家次住居の存在が推定される		126		
N-1	SB40	奈良			瓦葺		住居の可能性は低く、陶器製土坑の可能性が高い		127	137	
					なし						
N-1	SB35	古墳後 -奈良		SB34 SD03 SK41 SX15	瓦葺	西側は円形の土坑状の 覆り込みがあり、遺物 より出土	瓦仏・埴輪・玉器土 遺物は仁智山本以東の 砂土より出土し、明ら かな流入である	住居とする確率的根拠なく、 東辺遺構河原に不整形土坑 の可能性が高い	127	136	112
					なし						
N-1	SD03	奈良	SB35	SK41			N-1 基点 SX03 と同一 遺構の可能性大		127	136	
N-1	SD04	奈良						S-1 基点まで連続しない	127	139	
S-1	SB08	奈良		SK07・08 SX01	瓦葺			住居の可能性低く、不整形 土坑の可能性が高い	127	130	
					なし						
S-1	SB11	奈良中			瓦葺			住居跡ではなく、方形土坑 の可能性が高い	127	129	
					なし						
S-1	礎土土坑	奈良中後			平造		土坑内より板状石が検 出	礎土中に礎土・炭を含むが 壁面の焼けはほとんどみら れない	127		

表15 VI区1次面主要検出遺構一覧表



写真113 N-2地点1次面(東から)



写真114 S-1地点1次面(東から)



写真115 S-2地点1次面(東から)



写真116 N-1地点1次面(西から)



写真117 S-3地点1次面(東から)



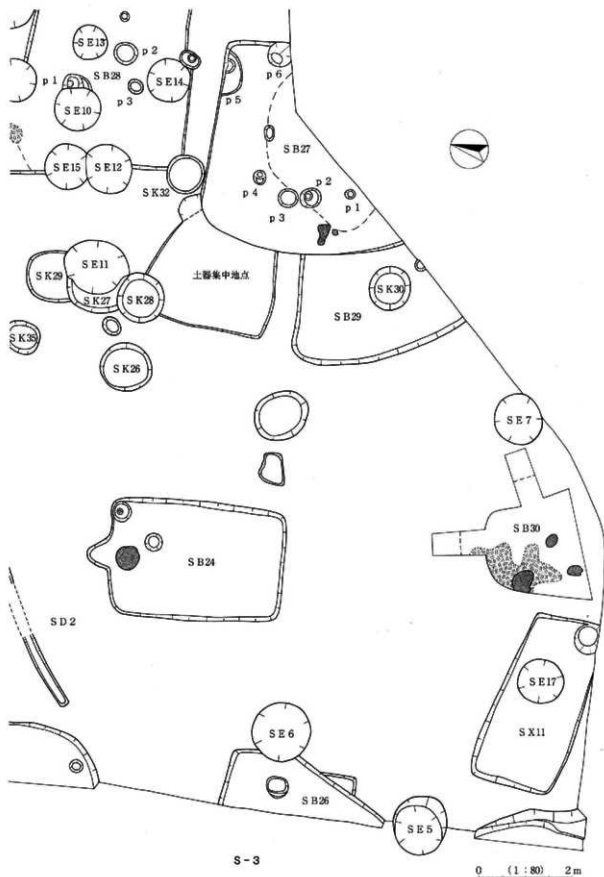


图117 VI区1次面遺構実測图① (S = 1/80)

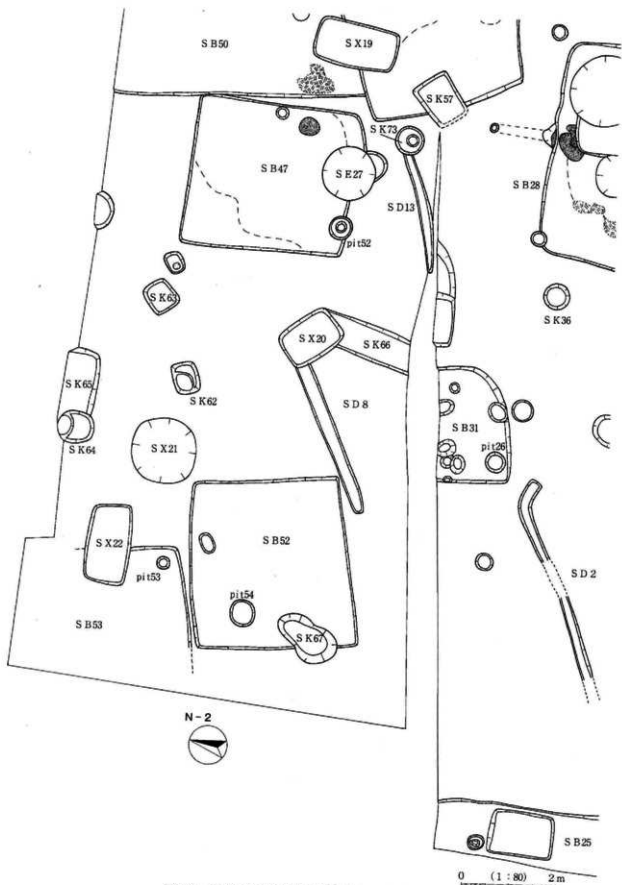


图118 VI区1次面遺構実測图② (S = 1/80)

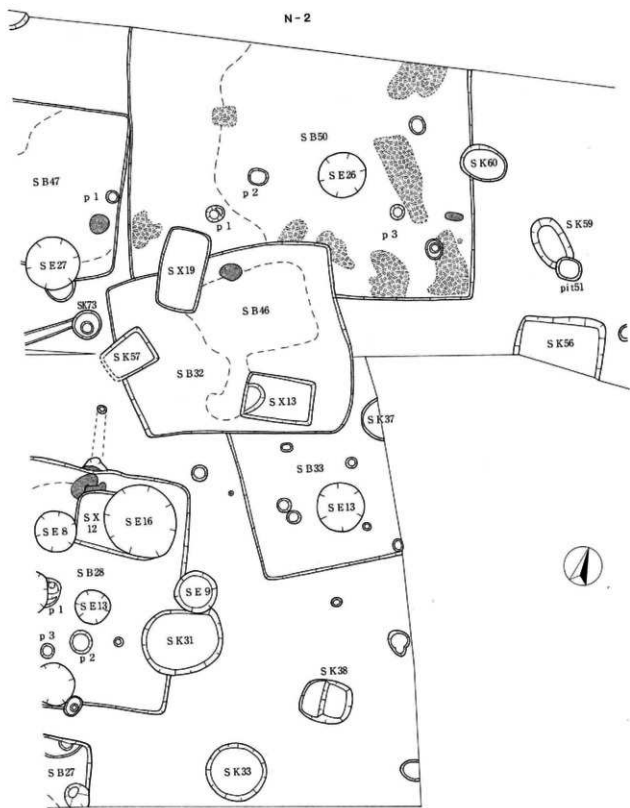


图119 VI区1次面遺構実測図③ (S = 1/80)

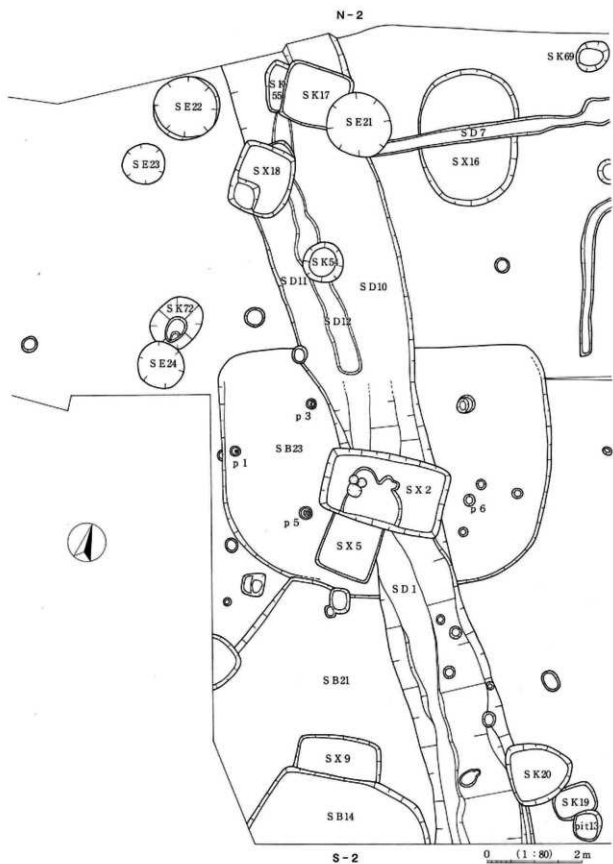


图120 VI区1次面遺構実測図④ (S = 1/80)

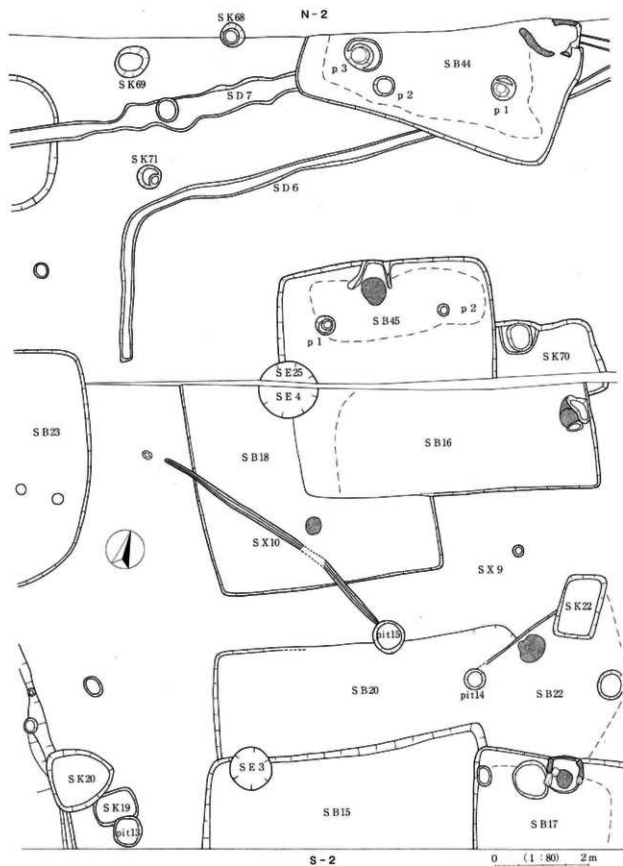


图121 VI区 1次面遺構実測図⑤ (S = 1/80)

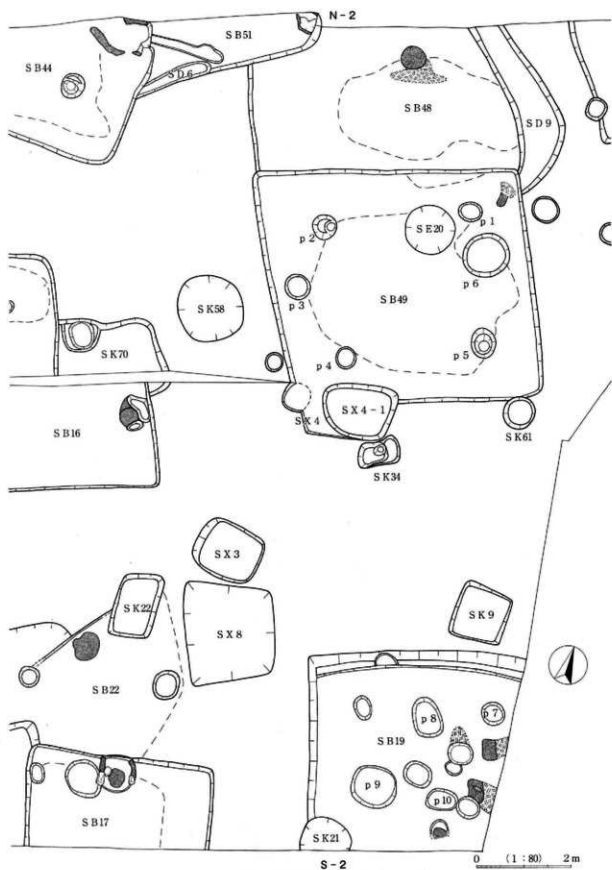


图122 VI区1次面遺構実測図⑥ (S = 1/80)

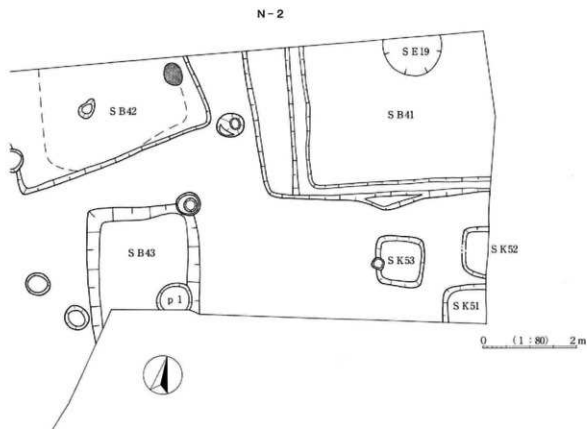


图123 VI区1次面遺構実測図⑦ (S = 1/80)



写真118 N-1 地点SB34・38



写真119 N-1 地点SB36・37・39



写真120 N-2 地点SB45



写真121 N-2 地点SB50



写真122 S-1地点SB09



写真123 S-1地点SB04



写真124 S-2地点SB19



写真125 S-2地点SB23

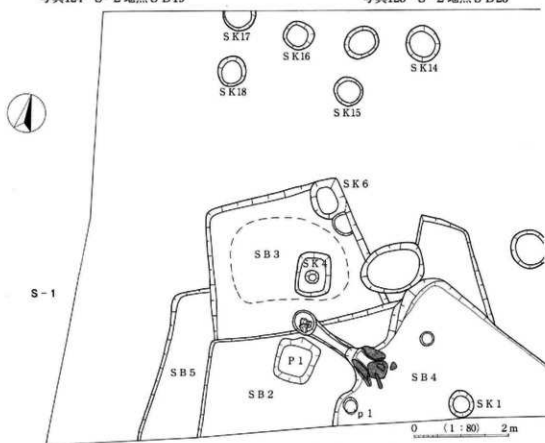


图124 VI区1次面遺構実測図⑧ (S = 1/80)

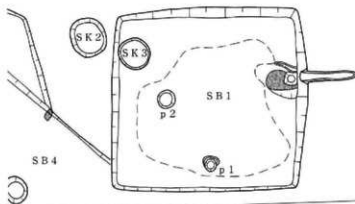
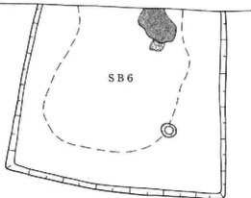
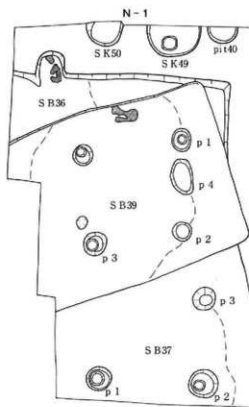




写真126 S-3地点SB24



写真12 S-3地点SB27



S-1

0 (1:80) 2m

图125 VI区1次面遺構実測图⑨ (S = 1/80)

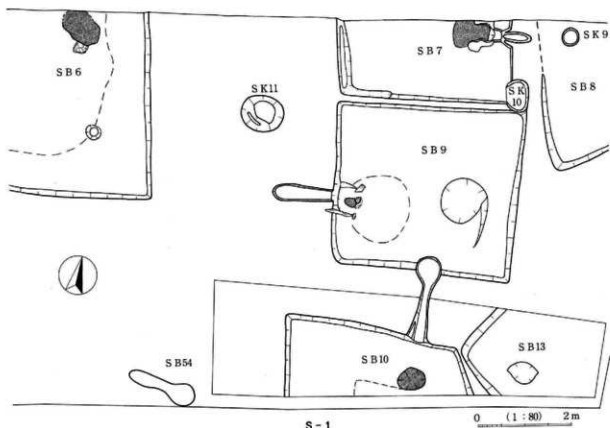
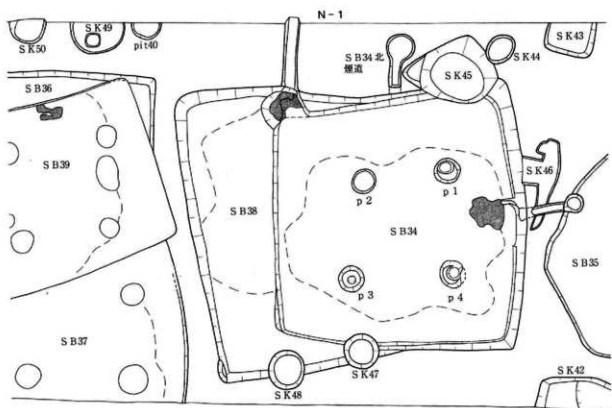


图126 VI区1次面遺構実測図④ (S = 1/80)

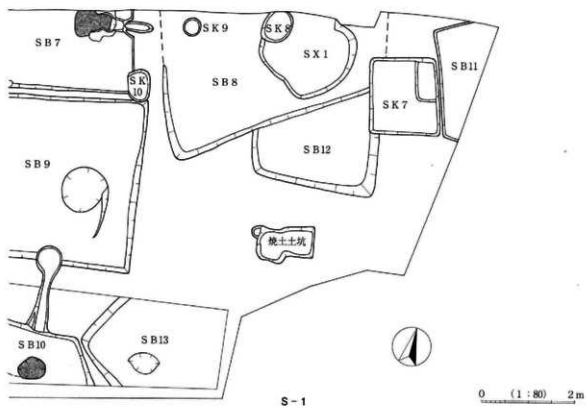
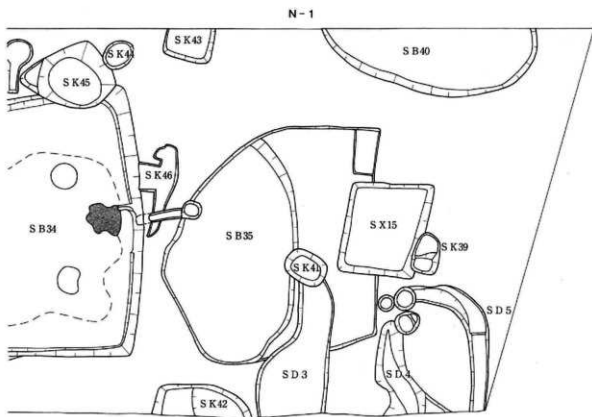


图127 VI区1次面遗构实测图① (S=1/80)

S-2地点 SX08 一辺約2.2mを測る方形土坑である。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、土器片が大量に出土している。

土器の出土状況は上下2図で示したが、これは調査期間の違いに起因する。上図は当初調査成果で、遺物取り上げ後、西壁が広がる事が確認された。長野オリンピック開催による調査中断期間直前であったため、一時埋め戻し、翌春、再調査を行った結果が下図である。

遺物は確認面付近での出土は極めて少なく、確認面下30cmほどより出土し始め、底部まで累々と集積されていた。隣接する土器には同一個体とみられる破片が多く観察された。完形で出土した土器は1点のみで、ほぼすべてが破片と化している。また、土器片中には拳大から頭大の石が顕著に混じっていた。この石はいずれも加工痕のない自然石であった。土坑底部は平坦でなんら施設等は認められない。

土器の出土状況や接合状況からは細片化後に投棄された可能性は低いとみられる。特に小型器種の復元率は高く、石材を合わせて考えると、土坑内で石材の投げ込み等によって細片化した可能性が想起される。また、土器片は各破片が接合していて間層はみられず、一時期に投棄された一括遺物と把握することができる。

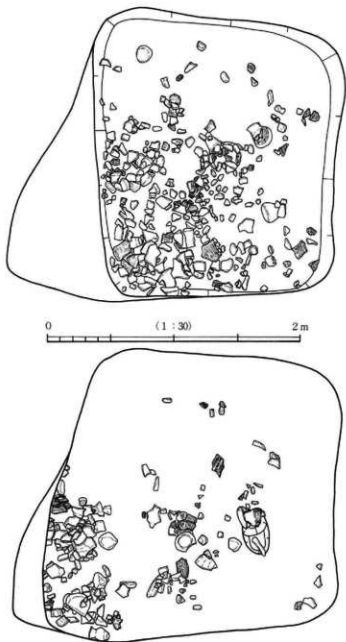


図128 SX08遺物出土状況実測図 (S = 1/30)

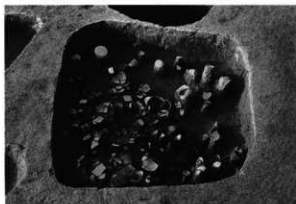


写真128 SX08遺物出土状況(上図)



写真129 SX08遺物出土状況(下図)

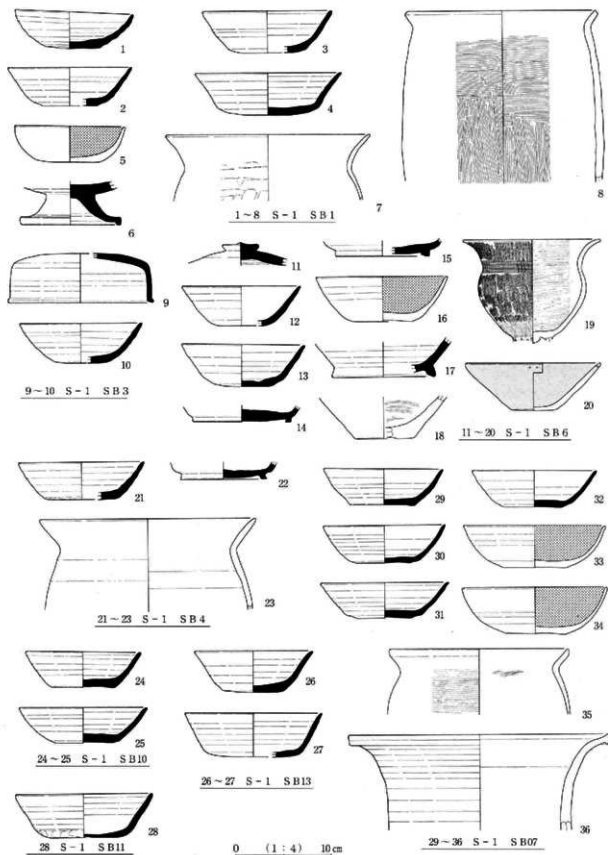


图129 VI区1次面出土土器实测图① (S = 1/4)

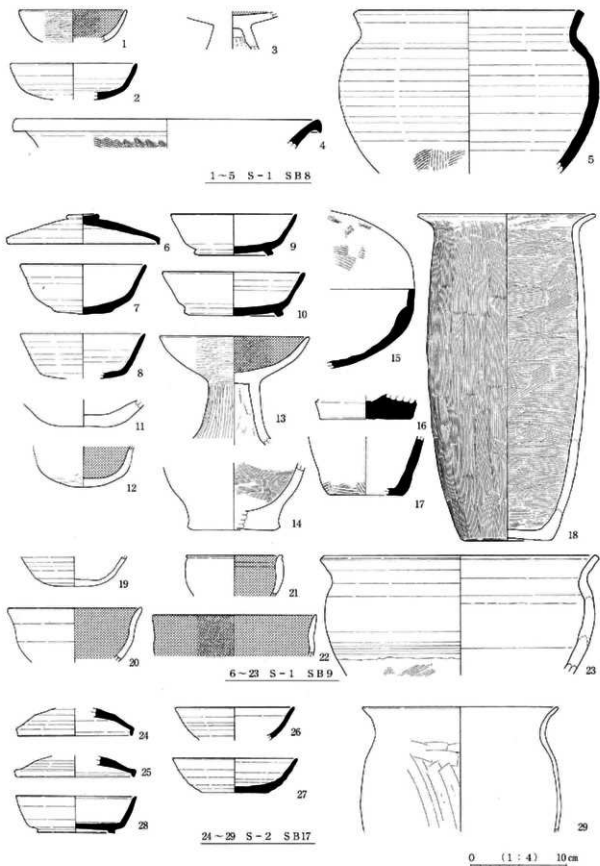


图130 W区1次面出土土器实测图② (S = 1 / 4)

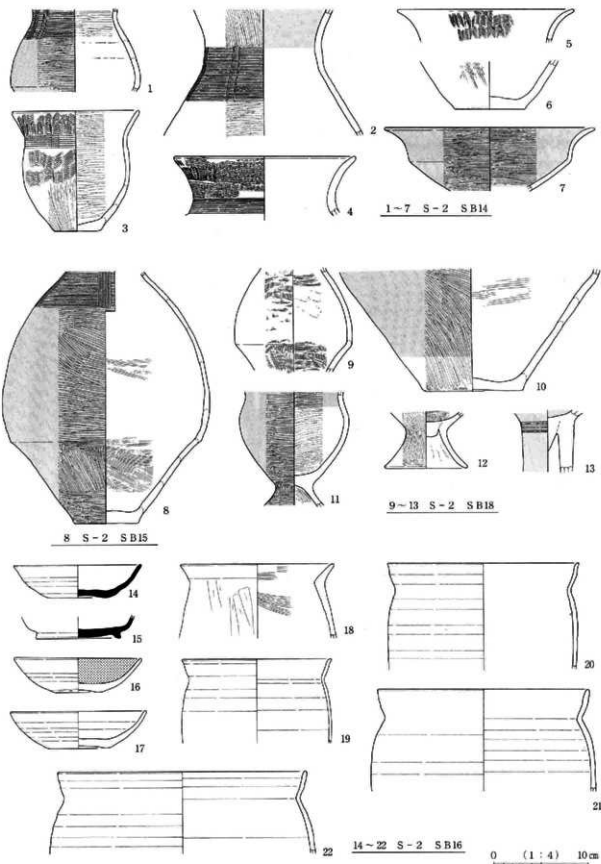
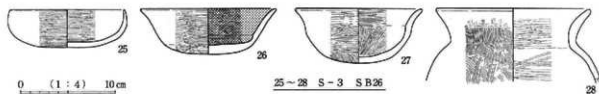
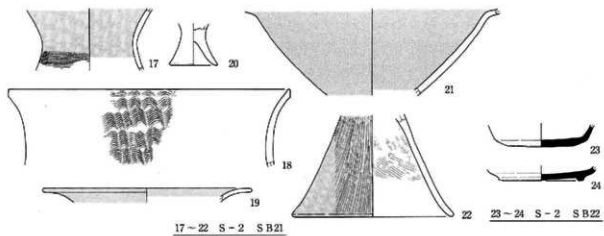
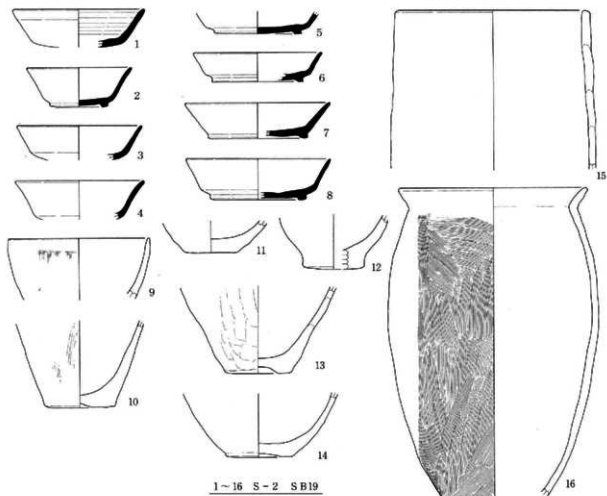


图131 VI区1次面出土土器实测图③ (S = 1/4)



0 (1:4) 10cm

图132 VI区1次面出土土器实测图④ (S-1/4)



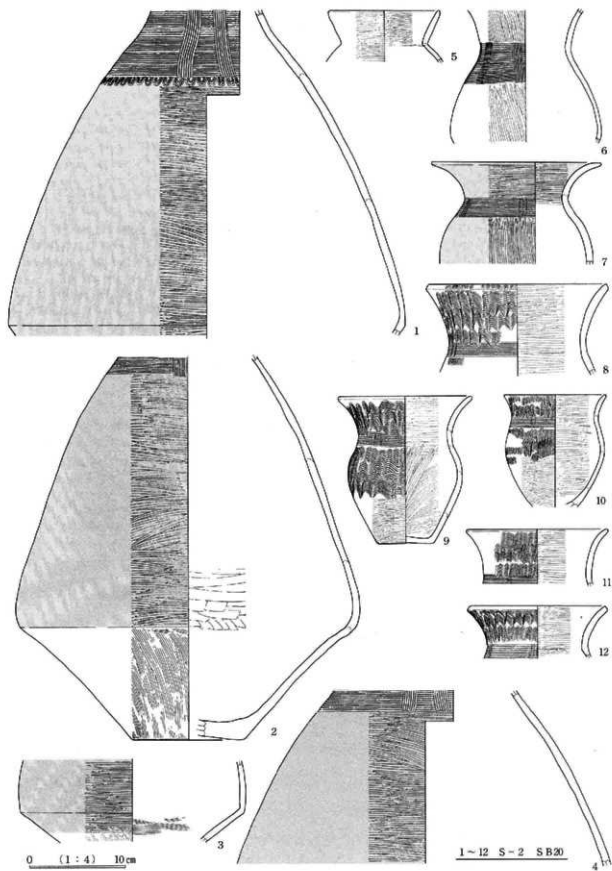


图133 VI区1次面出土土器实测图⑤ (S = 1 / 4)

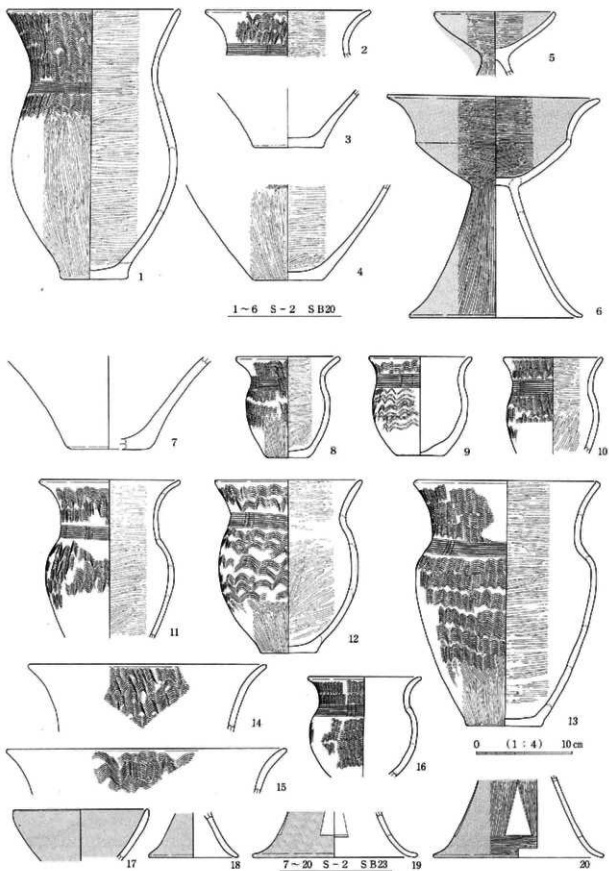


图134 VI区1次而出土土器实测图⑥ (S = 1/4)

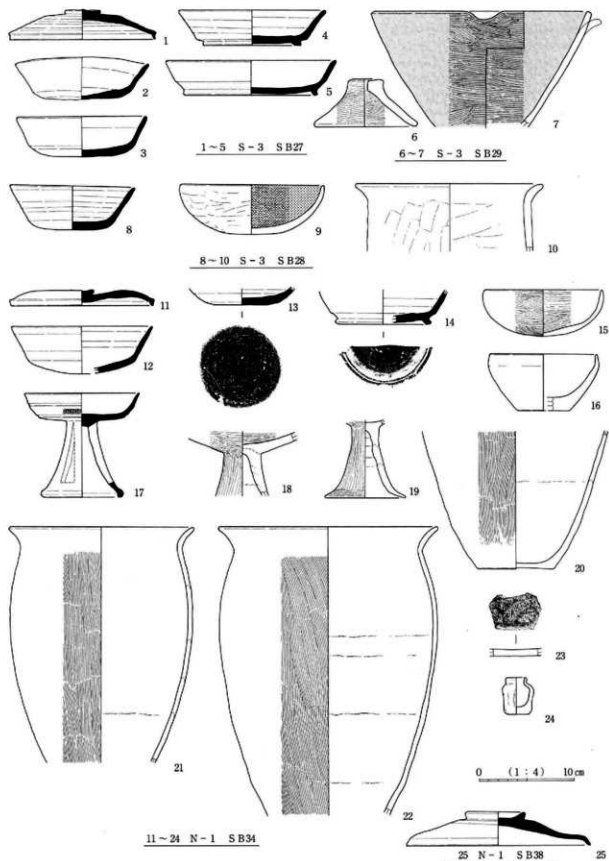
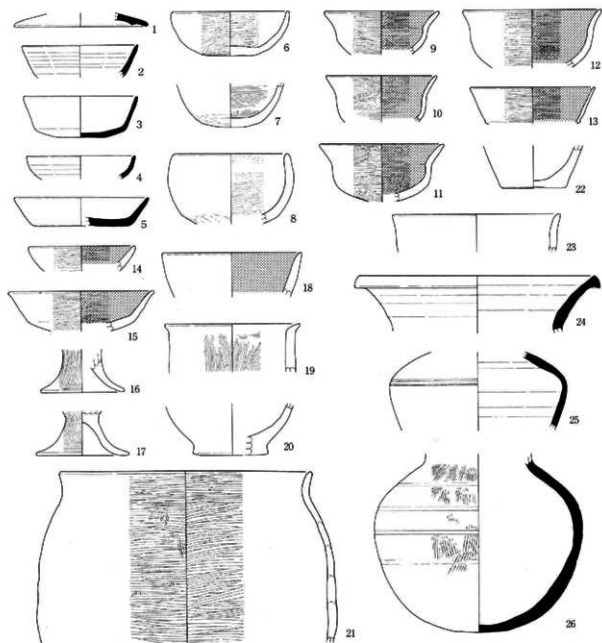
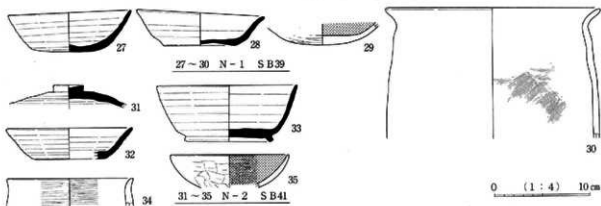


图135 VI区1次面出土土器实测图⑦ (S = 1/4)



1~26 N-1 SB35



27~30 N-1 SB39

31~35 N-2 SB41

0 (1:4) 10cm

图136 VI区1次面出土土器实测图⑧ (S=1/4)

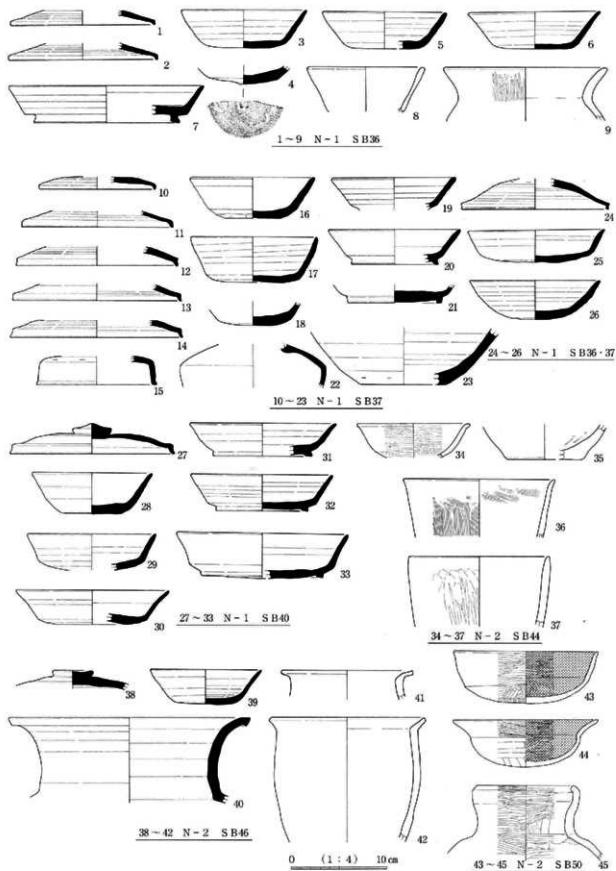


图137 VI区1次面出土土器实测图⑨(S=1/4)

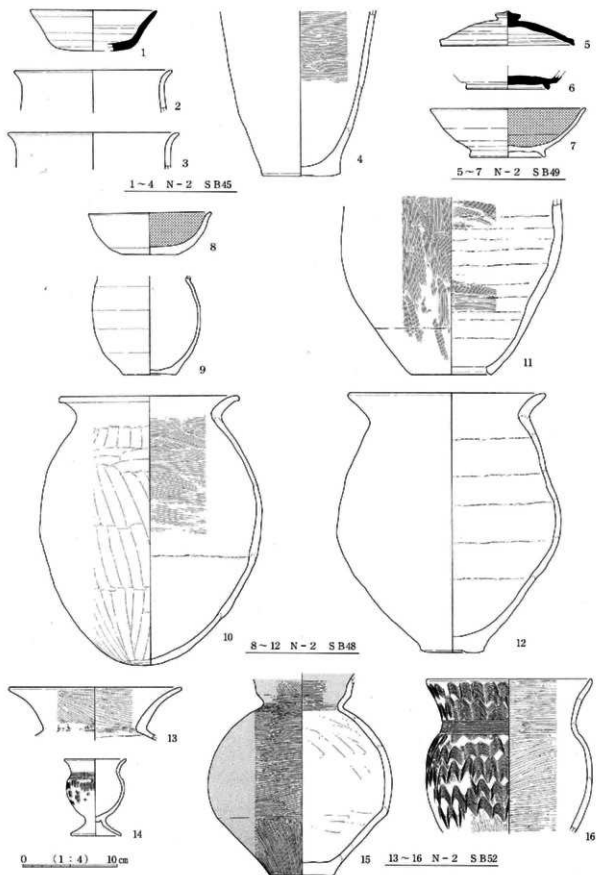


图138 VI区1次面出土土器实测图⑤ (S = 1/4)

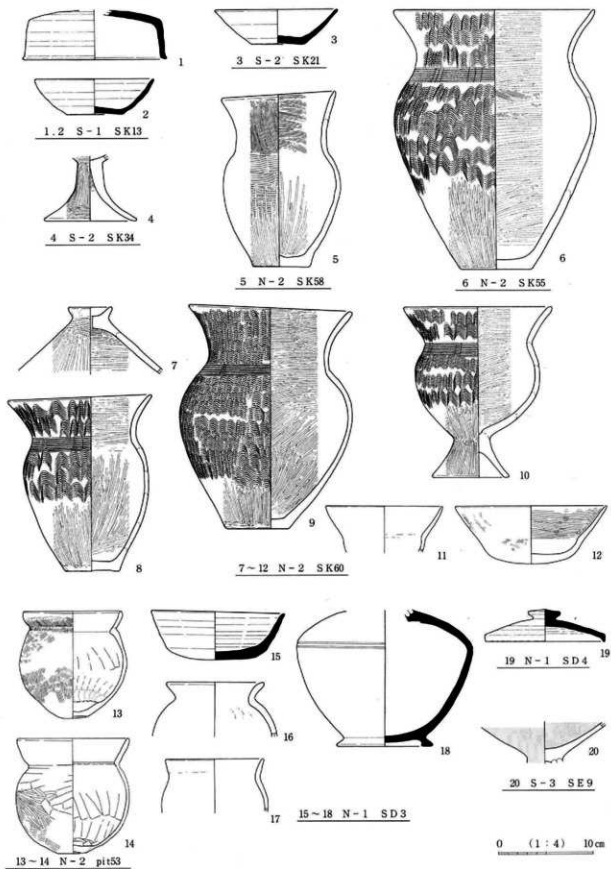


图139 VI区1次面出土土器实测图①(S = 1/4)

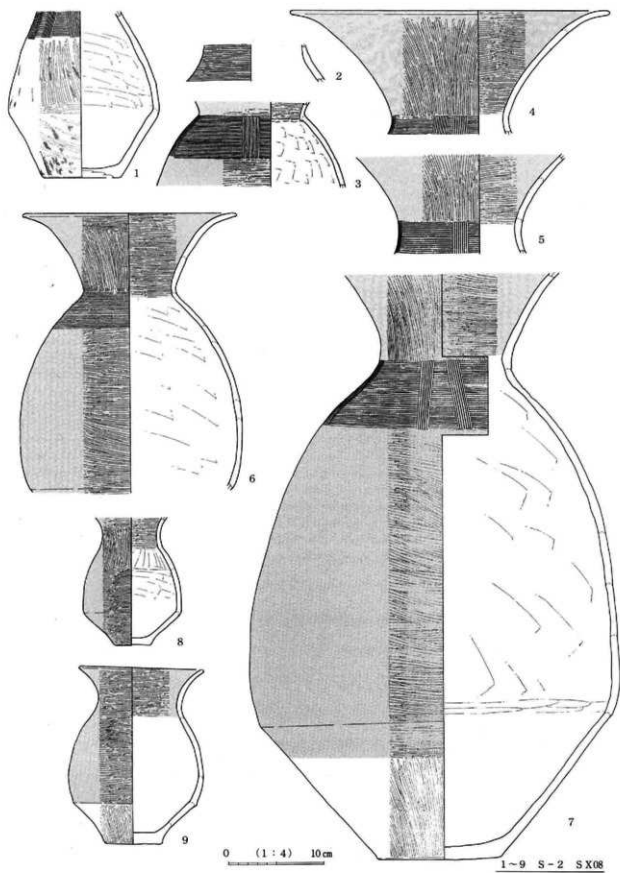


图140 VI区1次面出土土器实测图② (S = 1/4)



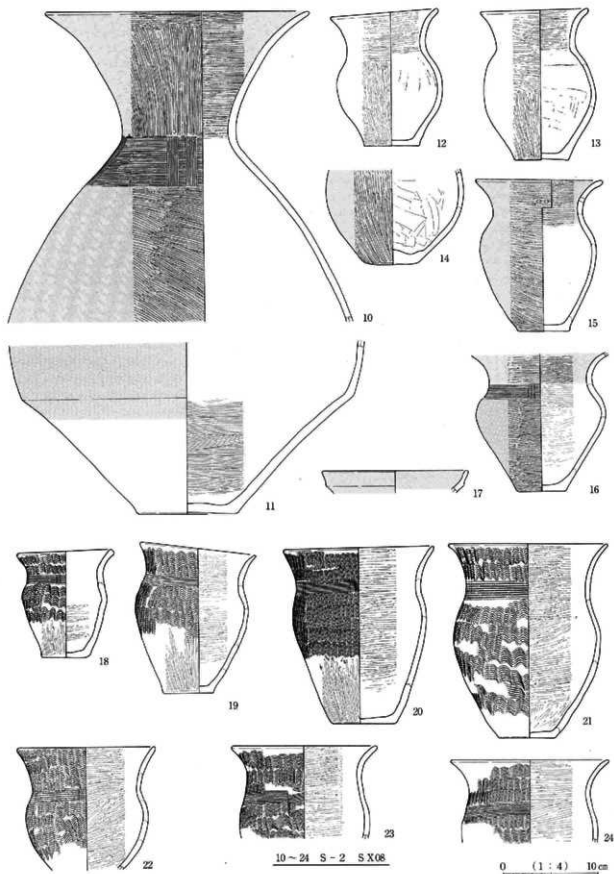


图141 VI区1次面出土土器实测图③ (S = 1 / 4)

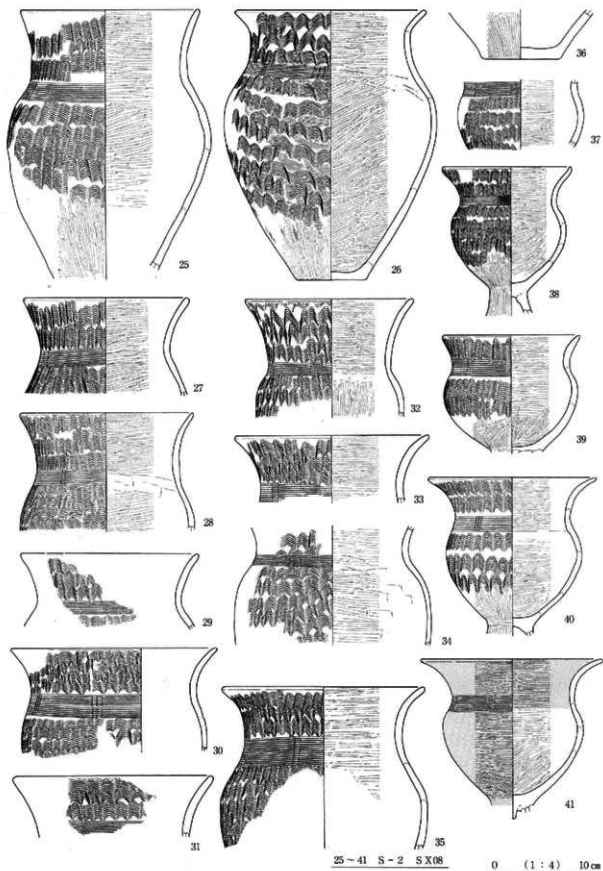


图142 VI区1次面出土土器实测图④(S=1/4)

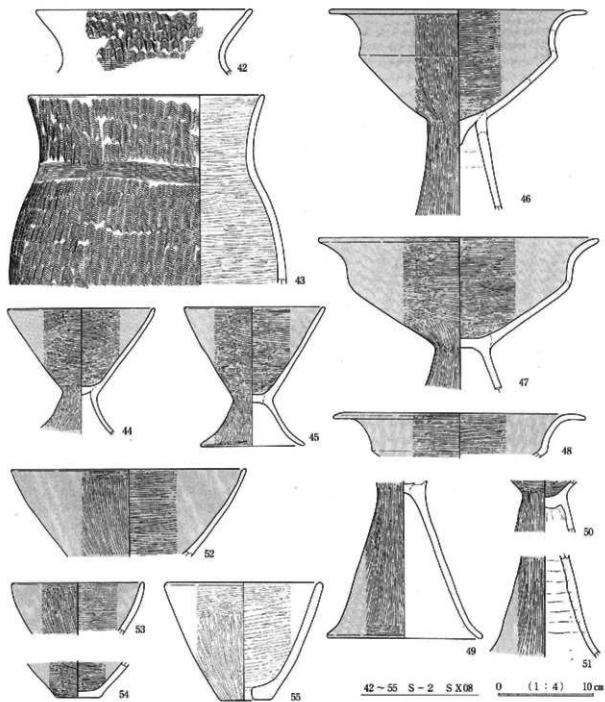


图143 VI区1次而出土土器实测图⑬ (S = 1/4)

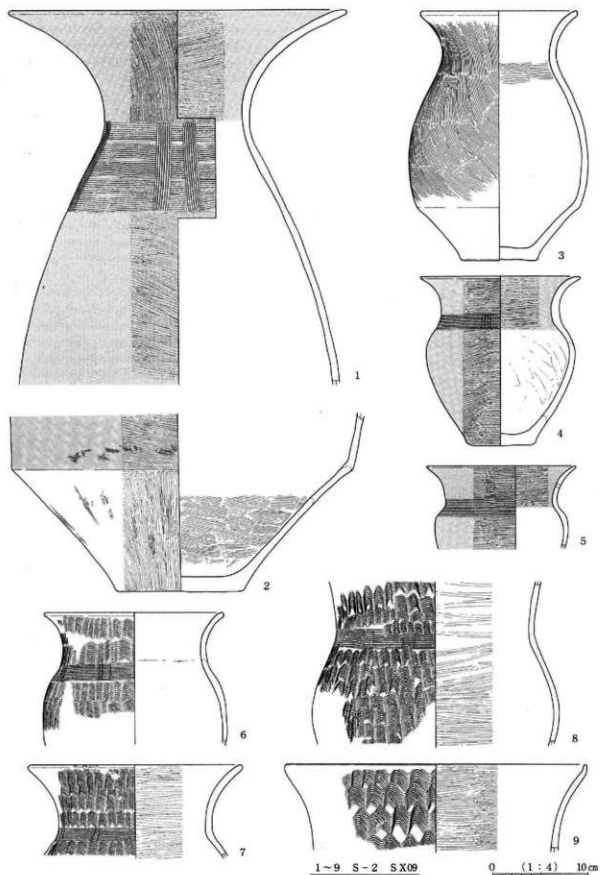


图144 VI区1次面出土土器实测图⑨ (S = 1/4)

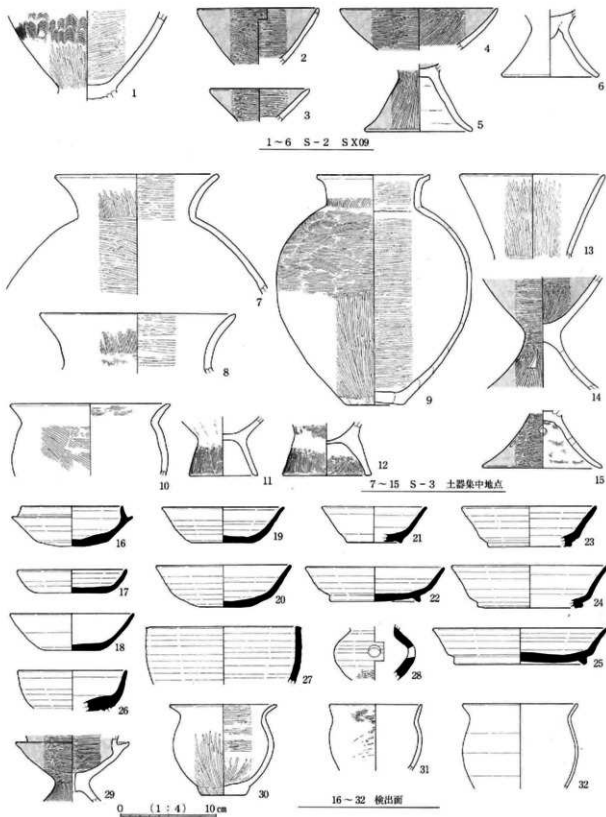


图145 VI区1次面出土土器实测图⑦(S=1/4)

## 2 2次面・3次面の調査

弥生時代後期から古墳時代前期を主体とした遺構調査面である。1次面検出遺構下に存在する古墳時代後期～奈良時代遺構の調査も合わせて実施している。また、S-3地点では2次面で確認された方形周溝墓群のプランが不明瞭であったことから3次面の調査を実施している。3次面では周溝墓群のプラン確定とともに弥生時代後期の土器棺が1基検出されている。各地点で弥生時代後期を主体とした遺構が確認され、調査区全面に展開する。V区以東では極めて希薄であったが、新幹線地点を合わせて遺構密集度は非常に高い。なお、前記したようにS-2地点1次面で確認された弥生時代遺構を含めて扱う。

**古墳時代前期** 竪穴住居1(N-2区SB25)、方形周溝墓1(S-3区SDZ01)、土坑3、井戸1、土器集中(S-3区1次面土器集中)が該当する。いずれも調査区西側のみみられ、分布範囲は限定される。SDZ01は最も西側で検出された周溝墓である。SDZ02と同一周溝と判断したSDZ03を掘り込んで重複する。周溝は北西-南東方向で、他の周溝墓と方向を揃える。調査区西壁付近では西へ緩やかに屈曲して周溝幅を増すことから、あるいは前方後方形になる可能性も想起される。周溝内からは壺・甕・器台・甌等の土器群が出土している。設置された状況は認められないが、比較的形態をよく残し、量も多い点で他の周溝墓と異なる。

**弥生時代後期** 調査区西側で方形周溝墓群、他に住居群が確認され、居住域と墓域の区分が把握される。

方形周溝墓群はS-3地点およびN-2地点西側で確認され、西側のV区では認められないことから南側へ展開することが予測される。墳丘が確認された周溝墓はなく、いずれも浅い周溝が検出されたにすぎない。S-3地点SDZ02は周溝内法で8×5.5m程度を測る長方形を呈し、南側にブリッジを持つ。東側に並列するSDZ03はSDZ02とほぼ同規模と想定されるが、N-2地点では周溝の続きが検出されていない。周溝の続きが予想された位置では細い溝が方形に巡るSDZ07・08が検出された。幅0.4m程度の溝が方形に巡り、SDZ08は東側で溝の途切れが認められる。小型周溝墓の可能性も考慮したが、墳丘や埋葬施設の存在などは認められず、性格を断定するには至っていない。なお、SDZ07・08の調査後、SDZ03の周溝を探したが検出されず、北側に周溝が巡らないことが確実視される。SDZ03の南側に位置するSDZ05・06は部分的な検出で、形態および覆土より周溝墓の可能性を想定している。

竪穴住居は20軒程度が検出され、北西-南東に主軸をもつものが主体をなし、北東-南西に主軸をもつものも4軒確認された。隣接する北陸新幹線地点と主軸方向やその多寡は合致し、V区SB17を含めて、一連の集落域と把握できる。規模は6×4m程度の隅丸長方形が一般的とみられるが、N-2地点SB22は8.8×4.5mを測る大型住居である。N-1地点SB15は柱穴・炉などが不明であるが、幅6.0m、長さ6.0m以上を測り、さらに大きくなる可能性が高い。貼床はSB02・SB14で確認され、他は硬化面で炉が検出されている。SB02・SB16・SB22では床面上に焼土・炭の散布が認められる。遺物は全体的に少なく、床面上に土器群が散乱する状況はみられなかった。このほか溝・土坑が少量検出されている。

N-2地点では遺構形態が判然としにくい部分から多量の土器群が出土した土器集中が確認されている。N-2地点ではSD06の東西両側に土器集中が認められた。西側のSX30は不整形土坑内より、東側のSX31は複数の土坑とその周辺より



写真130 S-3地点3次面全景

土器群が出土している。弥生時代後期箱清水式古相を主体し、本来一連の形成過程を経た可能性が考えられる。ただし、東側のSX31には新しい段階の土器が含まれ、土器集中の形成が複数の時期に渡っている可能性が高い。N・2区SX08は方形土坑内より多量の土器が出土した土器廃棄坑である。また、SX08の西側、SB16-20間からも多量の土器が出土しており（SX09）、同様の性格が想起される。

さて、これら土器集中や土器廃棄坑は隣接した狭い範囲より検出されている。さらに、N・2地点SB16とSB20間に設定したトレンチからは掘り込みを伴わずに土器小片が少なからず認められ、局所的集中度はさらに高い可能性が考えられる。また、土器集中や土器廃棄坑の周辺より検出された堅穴住居（S-2地点1次面SB14・15・18・20・21）はSB23を除き、いずれも貼床・柱穴・炉などが検出されていないと、N・S-1地点等の堅穴住居の確認状況と異なる。この違いを重視してそれらの遺構群を一般住居とは異なると仮定すると、土器集中地点の局所的集中は新幹線地点を含めた東側の居住域と西側の墓域の間にちょうど位置することとなり、鮮やかな対比をみせる。居住域と墓域を画する空白域に土器集中が継続的に形成された可能性も考えられよう。

地点名	遺構名	時代	発掘調査 先	図	平(横)断面 柱穴	付属施設	付記事項	備考	遺構群 区分	土器出 処区分	写真 番号	
S-3	SD201	弥生~古墳	SD202		平床		調査時遺構番号SX02	方形周溝墓か		146	165	135
S-3	SD202	弥生後期か		SD04	浅く平床			SD03と同一遺構と判断	方形周溝墓か	146		146
S-3	SD03	弥生後期		SD04	浅く平床			SD202と同一遺構と判断		146		166
S-3	SD04	古墳前期	SD202 SD03		浅く平床			古相周溝墓の可能性を想定して調査を行ったが、覆土は締まりの強い暗褐色でSD201・SD202と異なり、ほとんど遺物を含んでいないことから周溝墓の可能性低いと判断した。		146		
S-3	SB26	弥生後期		SD201 SD04	貼附 2?	伊 原部に炭敷布	伊原部の小ピットは当 位堅に伴うか	遺構プランは把握されず		146		
S-3	SB27	弥生後期		SD03	貼附 なし	伊	伊原のみ確認	遺構プランは把握されず		146		
S-3	SK25	古墳前期か								146		164
S-3	SK02	弥生後期		SD03						146		171
N-2	SB25	弥生~古墳		SB08 SB24	礎化面 1	北側に炭敷布 (伊原は確認されず)				147		162
N-2	SB08	古墳後期	SB25		(未完面)	表層				147		166*
N-2	SD207	弥生後期か	SD208					周溝状の溝は細く浅い	方形周溝墓の可能性は低い	148		141
N-2	SD208	弥生後期か		SD207				周溝状の溝は細く浅い	方形周溝墓の可能性は低い	148		141
S-3	SD203	弥生後期			浅く平床			N-2地点では周溝の跡が検出されなかった。		148	171	147
S-3	SD205	弥生後期		SB10 SB06	浅く平床					148		171
S-3	SD206	弥生後 ~古墳		SX01				部分的な検出で詳細不明		148		
S-3	SK15	古墳前期								148		164
S-3	SX01	古墳前期	SD206							148		166
S-2	SB06	古墳前期		SB10	(未完面)	表層		SB10後面にて検出		148		171
N-2	SB22	弥生後期			礎化面 3	伊	床面上に焼土・炭・高 分化材分布	S地点ではSB11により破壊 され、検出されなかった		149	165	131

検出点	遺構名	時代	遺物検出		土(石)質	付属施設	特記事項	備考	遺構長 [m]	土山山 頂部幅 [m]	検出 層位
			品	種							
S-3	SB11	不明			硬化層 なし		N地点では1次層SB46・50直下でSE22が検出されたため、すでに破壊されたと判断される		149		
S-3	SK16	古墳前期		SB11					149	171	
S-3	1号 土器棺	弥生後期					SD20掘削西側後段で検出したが、表土層削り作業中のため、位置情報欠番		158	169	132
N-2	SK30	弥生後期			平削 脆弱		不整形土坑内より土器・西側土器集中地点として調査実施		149	166	137
N-2	SD06	平安					1次層N地点SD10・11直下で検出された溝跡で、SD11と同一遺構と判断される		149	166	
N-2	SB23	弥生後期		SD06	硬化層 未検出		床面上で焼土・灰層跡	S2地点1次層SK23と同一遺構	150	162	
N-2	SK31	弥生後期					広範囲に腐食を伴わず土器片が出土	東側土器集中地点として調査実施	150	167	137
N-2	SK31	弥生後期					床面上より土器群が出土	東土器出土の大半は1次層SB48に伴うと考えられる	151	163	131
N-2	SK20	古墳前期	1次層 SB48・49		粘土 4	カマド残欠(北壁)			151	157	164
N-2	SB21	弥生後期			脆弱 なし		調査区南側期より積立した層1点出土。腐り込みはなく、また、蓋が認められないことから土器種の可塑性が高い		151	152	162
S-1	SB06	弥生後期		SB03	脆弱 未確認			壁欠け層であるか不明	153	159	
S-1	SB07	弥生後期			粘土 未確認				153	159	
S-1	SK09	弥生後期前							153	164	
S-1	SD01	弥生後期							153	164	
N-1	SB18	弥生後期			脆弱 3		1次層SB37より検出	奈良時代遺物は1次層SB37に帰属すると判断される	154	162	
N-1	SB15	弥生後期	SB16	SB14 SK20	脆弱 未確認			北陸系土器出土	154	161	
N-1	SB34	弥生後期	SB15					気層跡は1次層SB34に帰属			162
N-1	SB16	弥生後期		SB15	硬化層 1	※ 床面上に瓦敷布			154	161	
S-1	SB04	弥生後期	SB08	SB03	硬化層 2	※など未検出	床面上より土器群出土		153	154	145
S-1	SB03	弥生後期	SB04 SB08		硬化層 3	※			154		
S-1	SB05	弥生後期	SB08		硬化層 なし				154	159	
S-1	SB08	弥生後期		SB03・04 SB08	硬化層 6	※ 中央部に印の痕跡	床面上より多量の灰化材・焼土検出	SD05より検出	155	159	144
N-1	SB14	弥生後期	SB15		粘土 未検出		北陸系土器出土		156	161	
N-1	SB07	古墳前期	SB13・14		平削 脆弱 なし			井戸跡として調査したが、方形土坑と考えられる	156	166	
N-1	SB12	奈良			硬化層 なし	土坑状の掘り込み2条	東西側土坑内より焼土・瓦検出	一般住居跡とは考えがたい	156	161	
S-1	SB02	弥生後期			粘土 なし	※ が東側に土坑	床面は2面で、ともに壁厚ならびに焼土・灰の敷布を確認した。灰化材は下層面内で観察にみられた。		156	159	143
S-1	P601	弥生後期					底部より土器出土		156		

表16 VI区2・3次面検出主要遺構一覧表



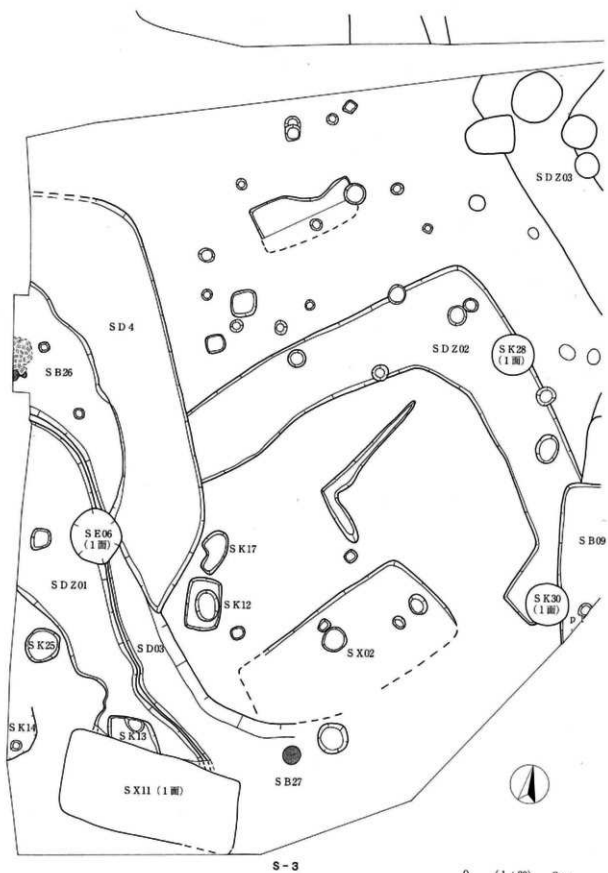


图146 VI区2次面遺構実測図① (S = 1/80)

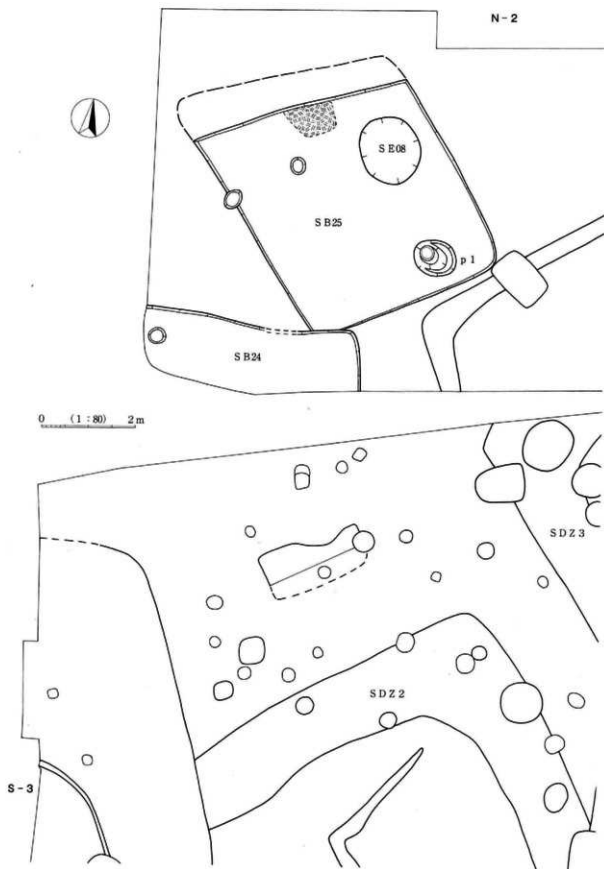


图147 VI区2次面遺構実測図② (S = 1/80)

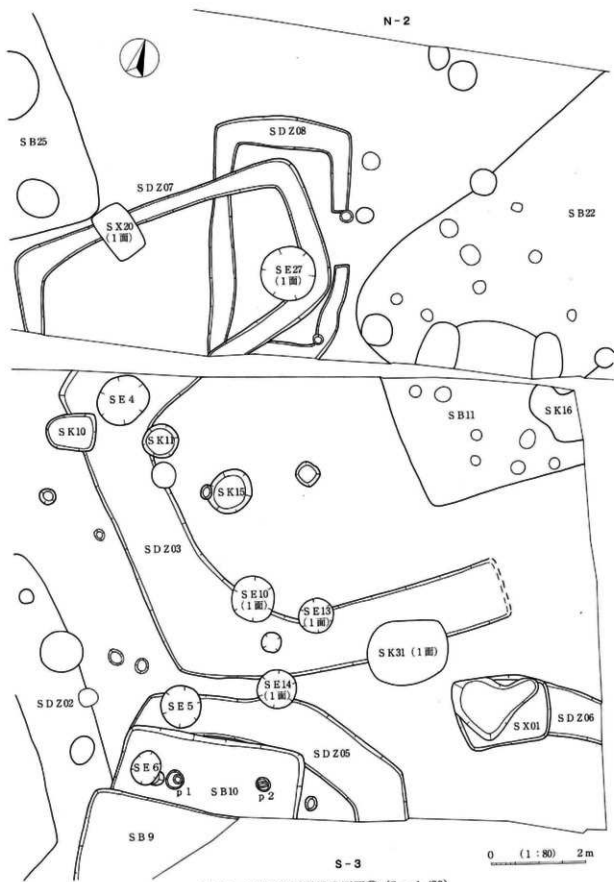


图148 VI区2次面遺構実測図③ (S = 1/80)

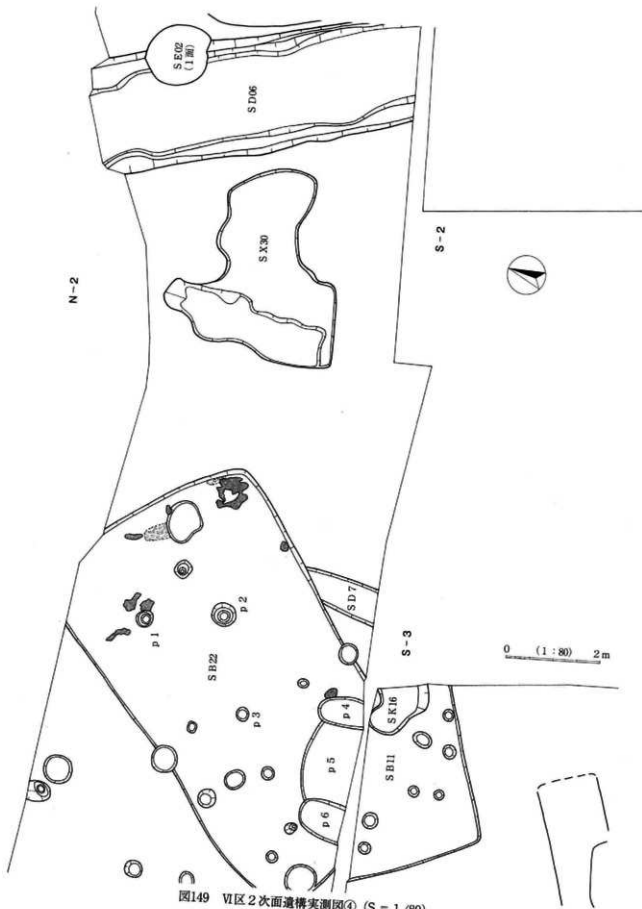


图149 VI区2次面遗构实测图④ (S=1/80)

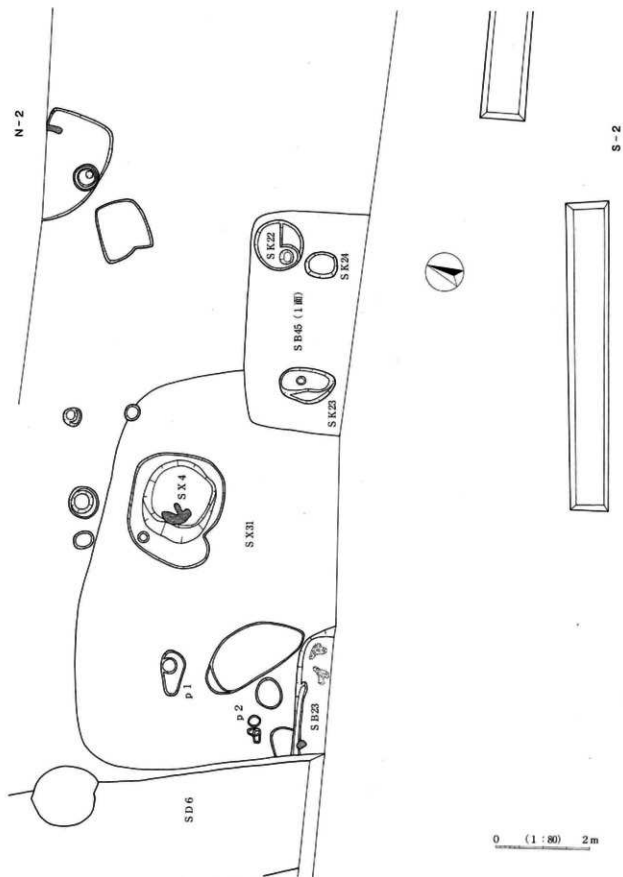


图150 VI区 2次面遺構実測图⑤ (S = 1/80)

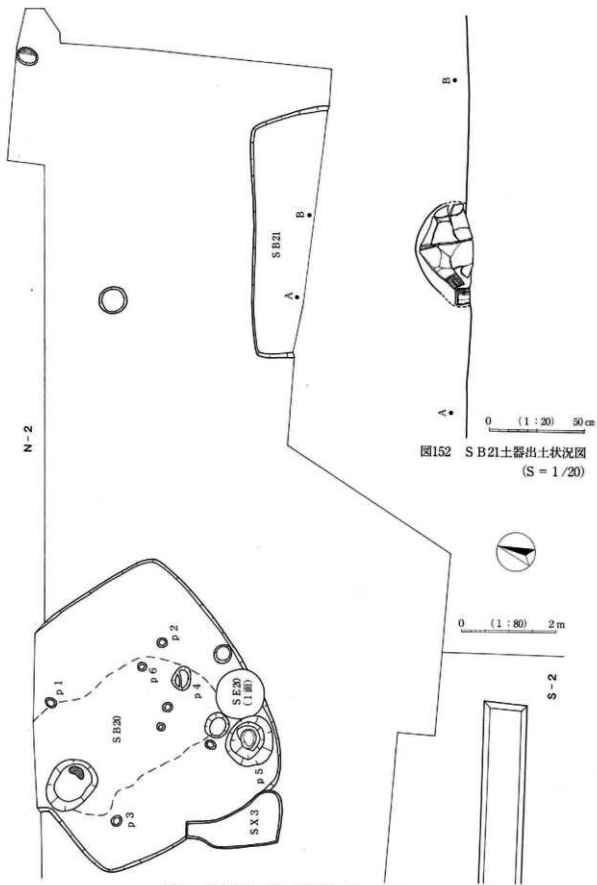


图151 VI区2次面遺構実測図⑥ (S = 1/80)

图152 S B21土器出土状況图  
(S = 1/20)

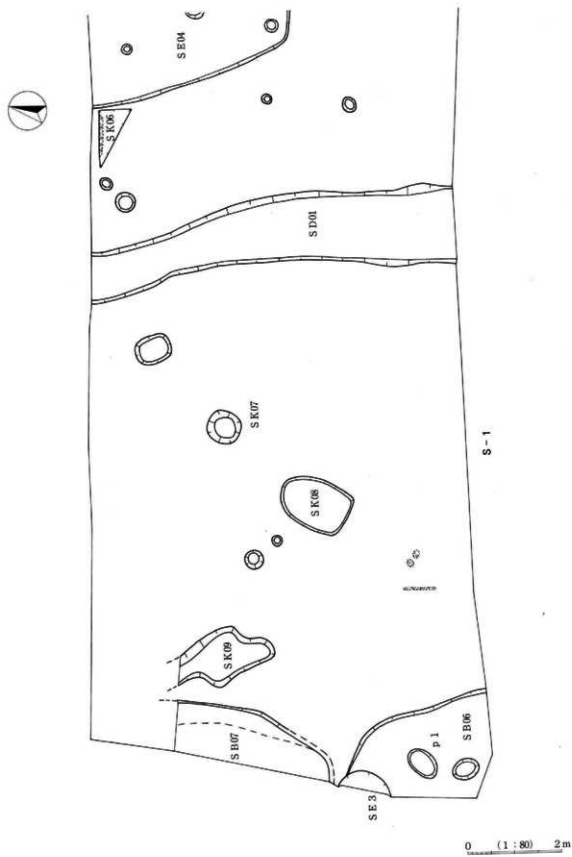


图153 VI区2次面遺構実測图⑦ (S = 1/80)

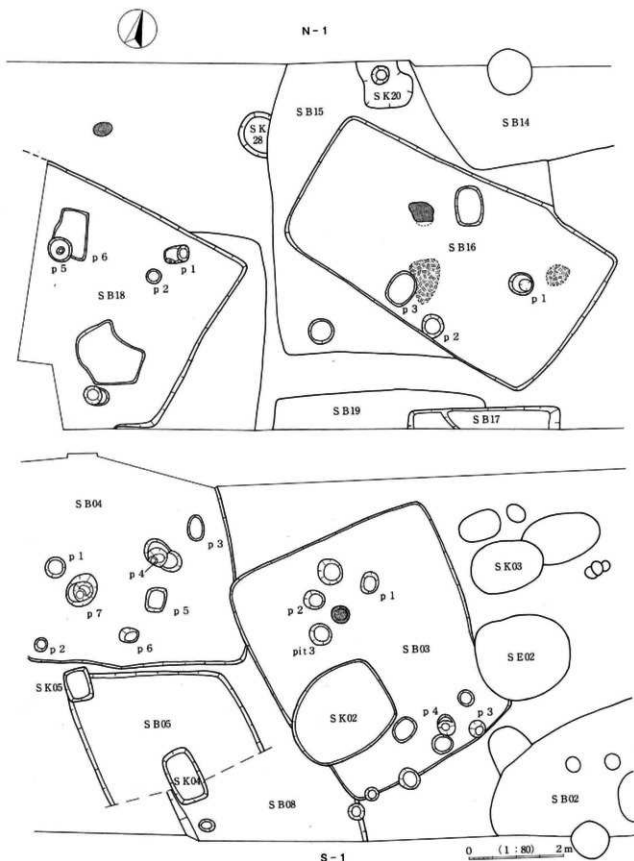


图154 VI区2次面遺構実測図⑧ (S = 1/80)



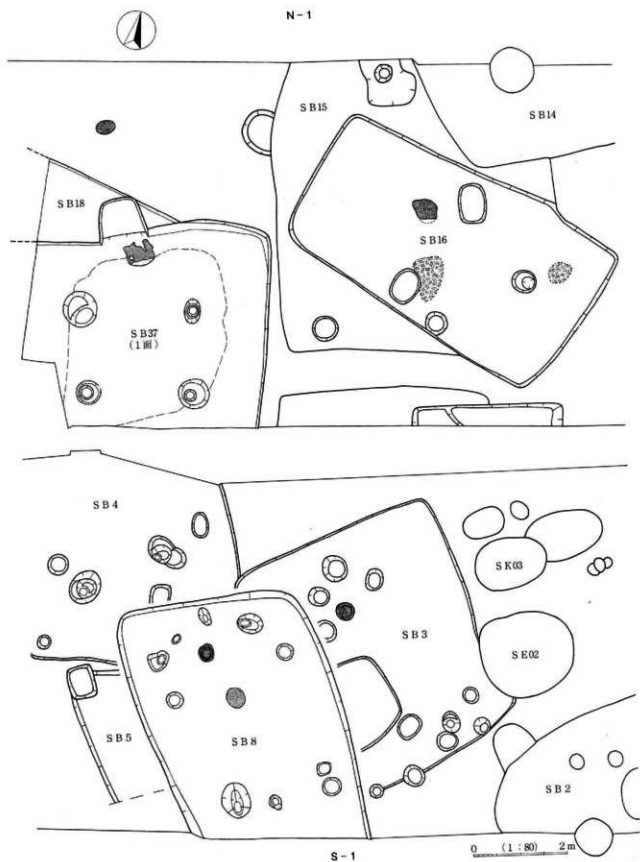


图155 VI区2次面遺構実測図⑨ (S-1 SB08) (S=1/80)

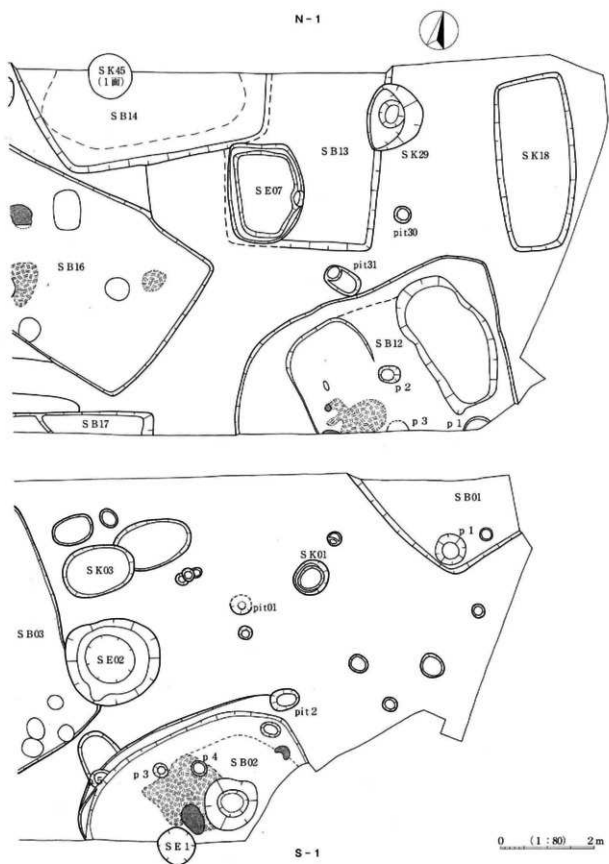


图156 VI区2次面遗构实测图② (S = 1/80)

N-2地点 SB20 一辺

5.5mを測る隅丸方形の  
 竪穴住居である。柱穴は  
 貼床を囲むように4箇所  
 認められる。北壁中央部  
 にはカマドが作り付けら  
 れているが、既に破壊さ  
 れており、痕跡が確認さ  
 れたにすぎない。カマド  
 想定範囲の土器群に混  
 じって角石が検出されて  
 おり、カマド構築材とみ  
 られる。遺物はカマド付  
 近および貼床上より土師  
 器が出土している。図  
 163の床面出土とした土  
 器群が主として該当し、  
 番号が対応している。土  
 器群は高杯を主体に壺・  
 甕より構成され、該期に

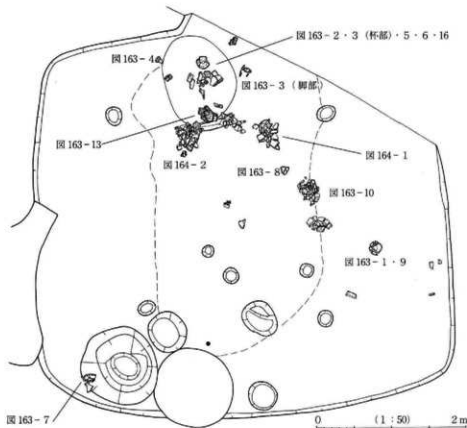


図157 N-2区SB20遺物出土状況実測図 (S=1/50)

特徴的な小型丸底土器を含まない。また、床面直上より滑  
 石製白玉が1点出土しており、ドットで位置を明示してい  
 る。

**1号土器棺** S-3区3次面の表土掘削作業中に確認された。  
 2次面調査時には本棺の存在を示す痕跡は確認されなかつ  
 た。また、周辺に同様な土器棺はなく、単独立地である。  
 棺は甕1個体を斜めに埋設  
 している。検出時には蓋は  
 なかったが、棺内出土土器  
 片により別個体の底部が復  
 元されたことから、蓋に覆  
 われていたと考えられる。  
 棺内部は土が充満していた  
 が、棺中央部に若干浮いた  
 状態で板石が1点認められ  
 たのみで出土遺物はない。  
 弥生時代後期で周溝墓群に  
 先行するとみられる。

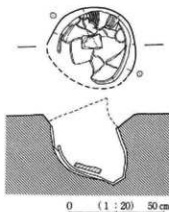


図158 1号土器棺検出状況実測図 (S=1/20)



写真131 SB20遺物出土状況

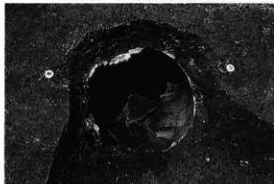


写真132 1号土器棺

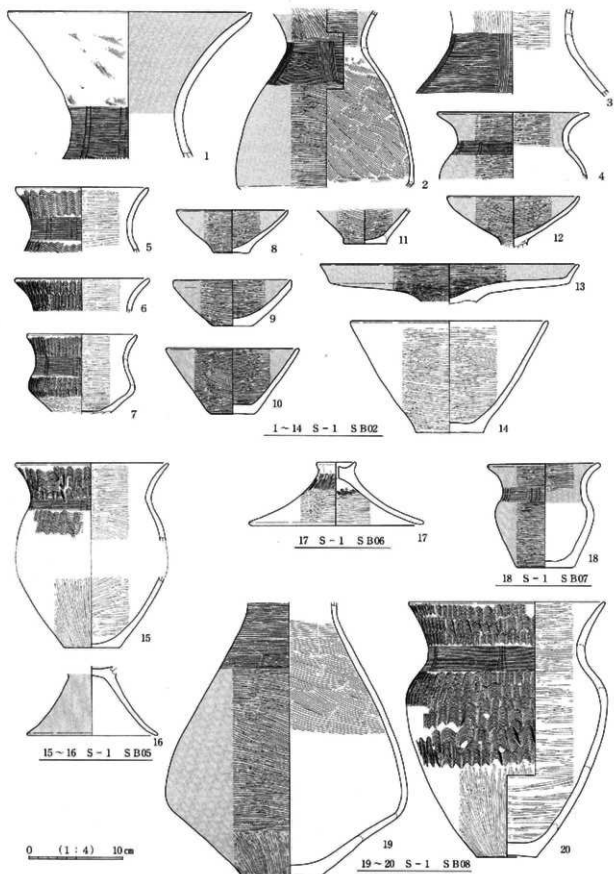


图159 VI区2次出土土器实测图① (S = 1 / 4)

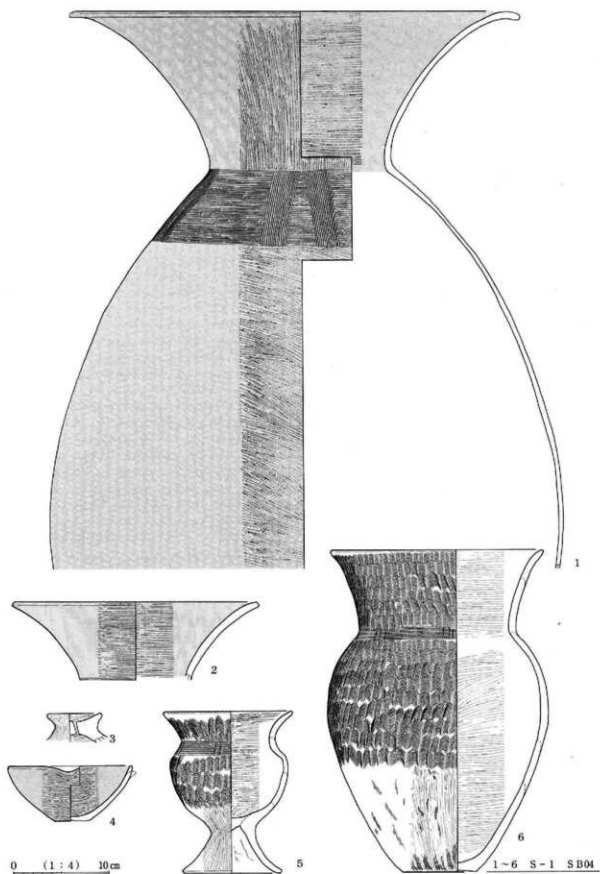


图160 VI区2次面出土土器尖测图② (S = 1/4)

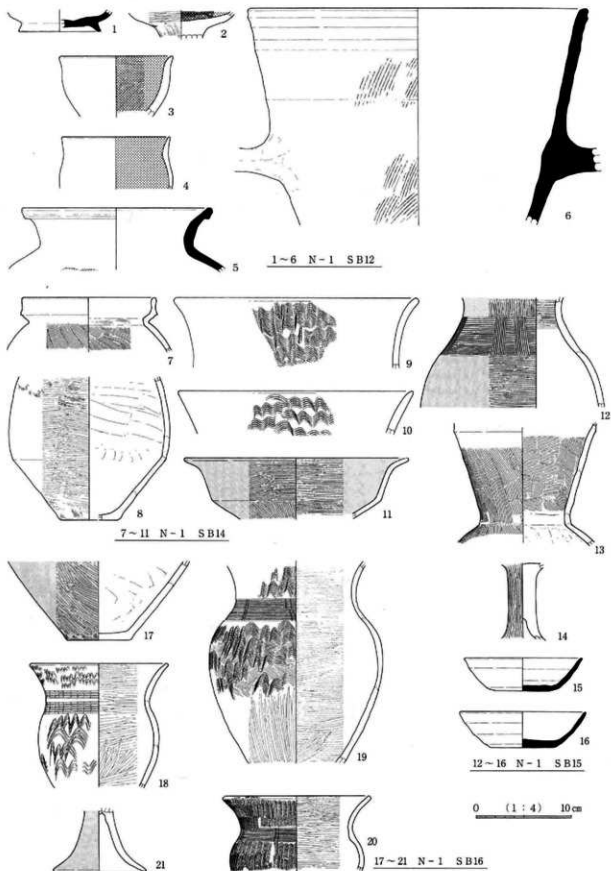


图161 VI区2次面出土土器实测图③ (S = 1/4)

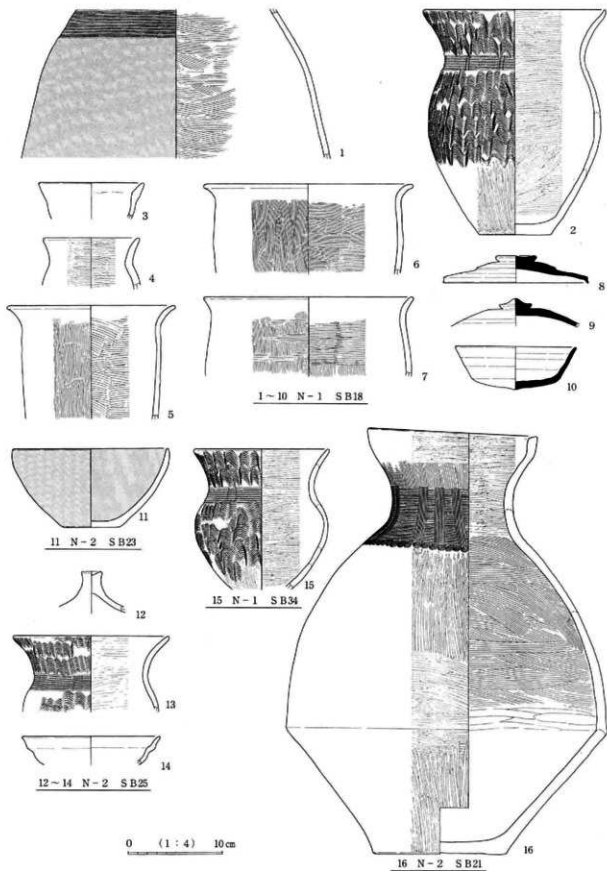


图162 VI区2次面出土土器实测图④ (S = 1/4)

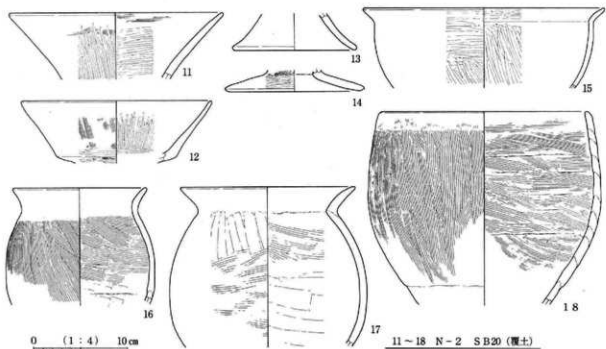
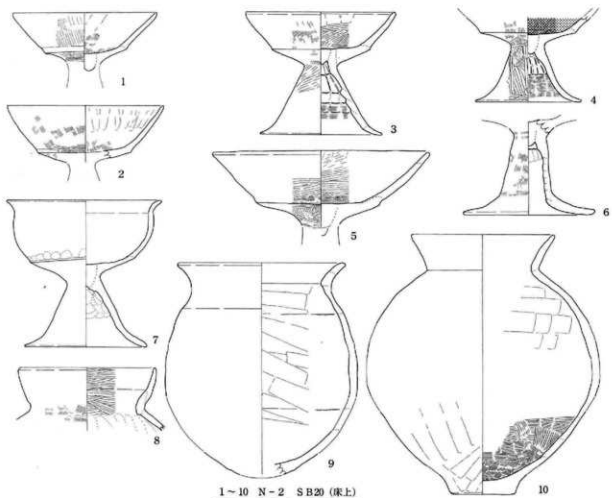


图163 VI区2次面出土土器实测图⑤ (S = 1 / 4)



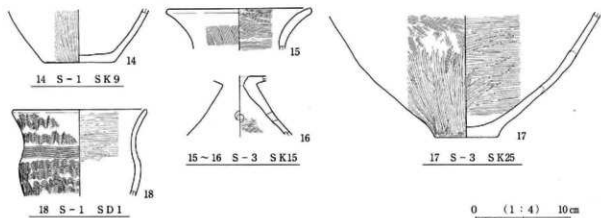
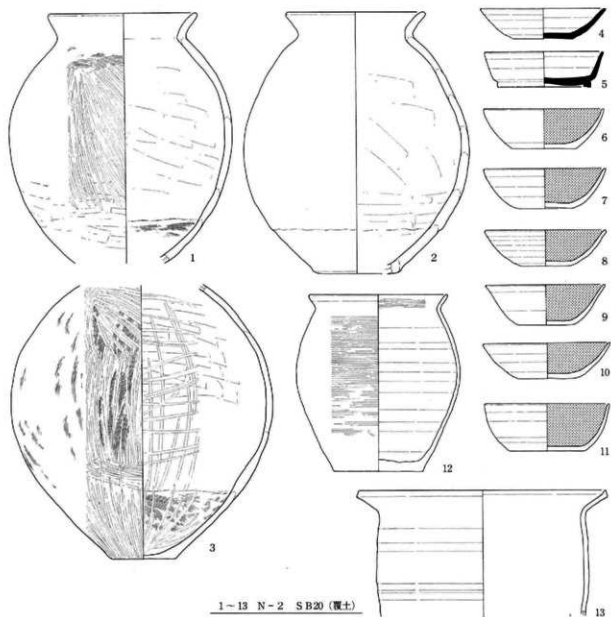


图164 VI区2次面出土土器实测图⑥ (S = 1/4)

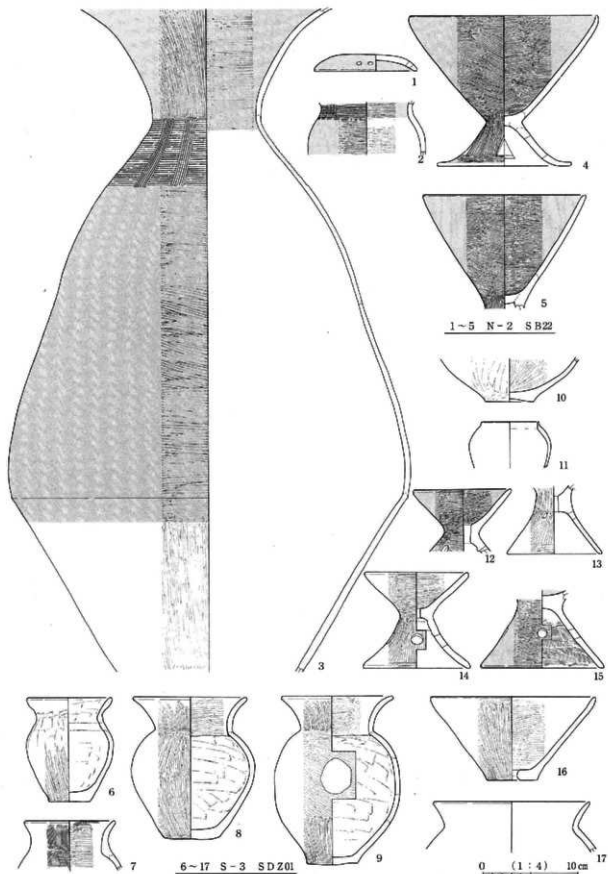


图165 VI区2次面出土土器实测图⑦ (S = 1 / 4)

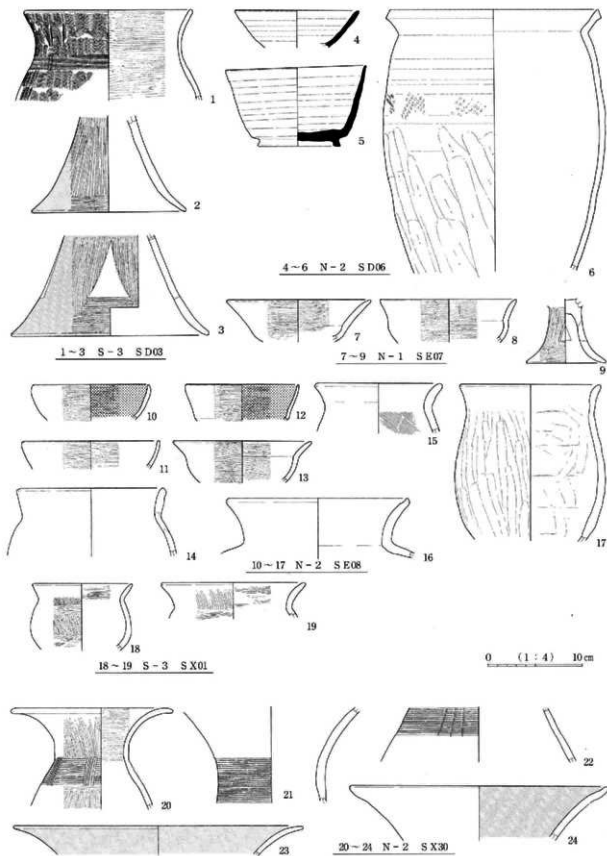


图166 VI区2次面出土土器实测图⑧ (S = 1/4)

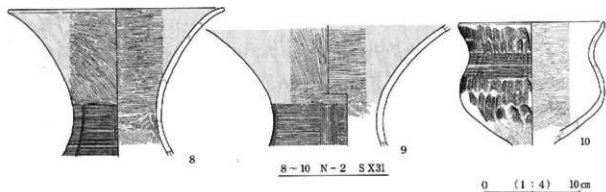
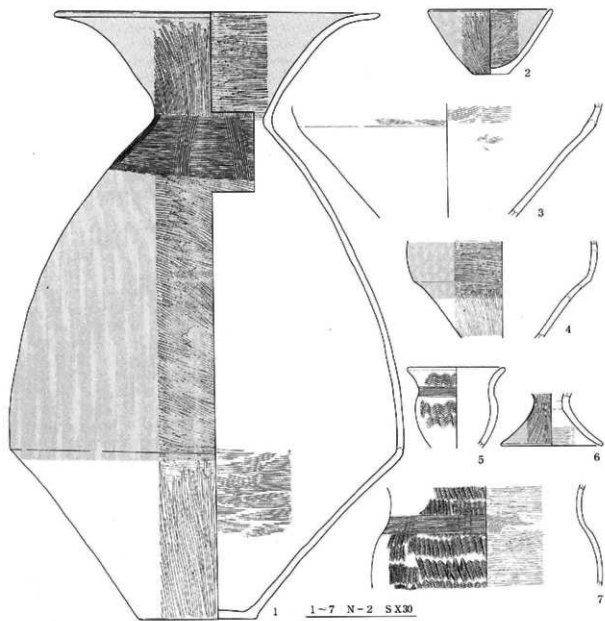


图167 VI区2次而出土土器实测图⑨(S=1/4)

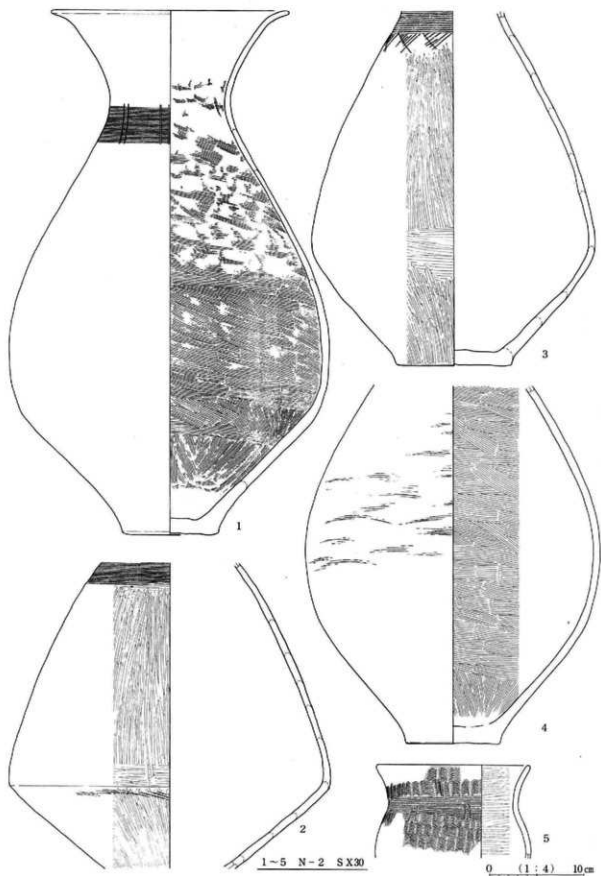
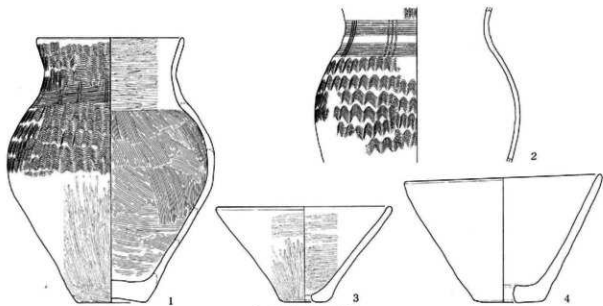
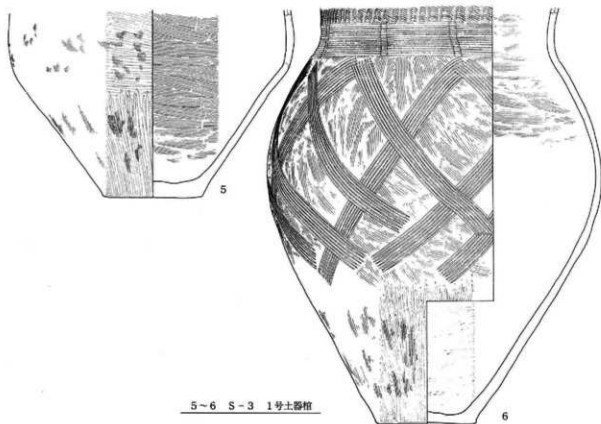


图168 VI区2次面出土土器实测图① (S = 1 / 4)



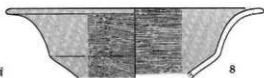
1~4 N-2 SX31



5~6 S-3 1号土器棺



0 (1:4) 10cm



7~8 横出面

图169 VI区2次面出土土器实测图①(S=1/4)

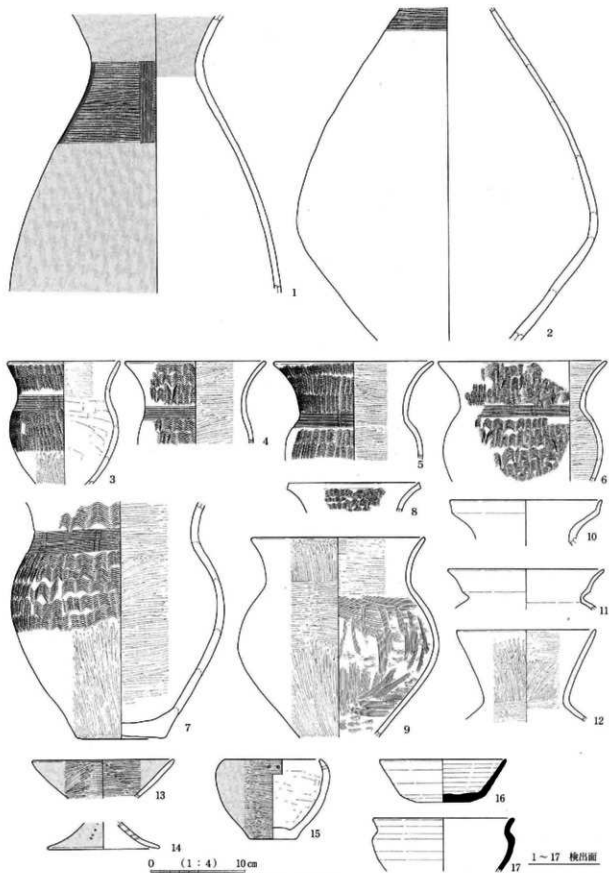


图170 VI区2次面出土土器实测图③ (S = 1/4)

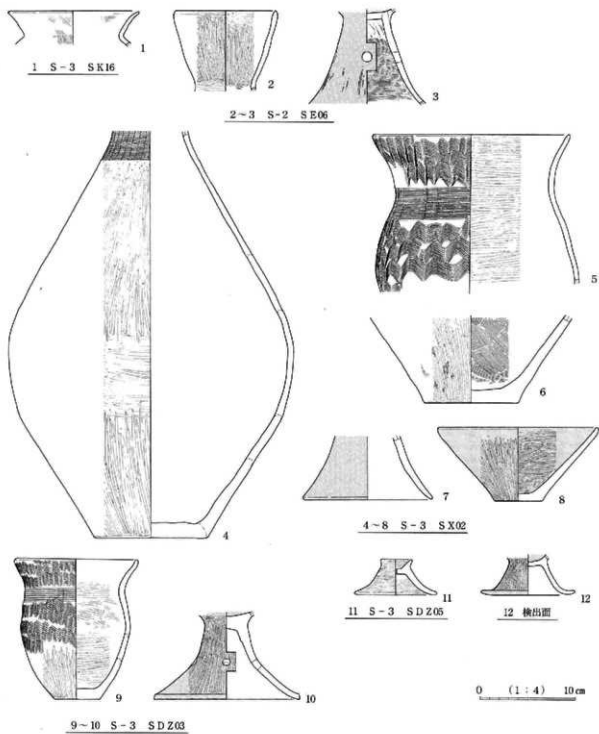


图171 VI区3次面出土土器实测图 (S=1/4)





写真133  
N-1 地点  
2次面全景



写真134  
N-2 地点  
SB22



写真135  
S-3 地点  
SD Z01



写真136 N-2 地点 2次面全景



写真137 N-2 地点土器集中



写真138 S X30 (西側土器集中)

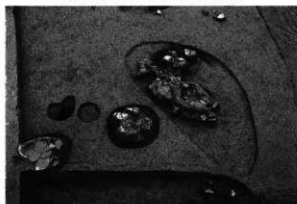


写真139 S X31 (東側土器集中)



写真140 N-2地点SB21土器出土状況



写真141 N-2地点SD Z07・08



写真142 S-1地点2次面全景



写真143 S-1地点SB02下層床面検出状況



写真144 S-1地点SB08炭化物検出状況



写真145 S-1地点SB04



写真146 S-3地点SD Z02



写真147 S-3地点SD Z03

## X VII区の調査

VII区は北陸新幹線建設用工事道路により南北に2分(N・S区)し、隣接畑への出入口確保のためさらにそれぞれを3分割した都合6地点で発掘調査を実施した。N区は西から1・2・3地点、S区は1・3・2地点と調査実施順に地点名を呼称したため、南北に隣接する地区で細分割地点名が異なる点に注意が必要となる。発掘調査はそれぞれの地点で2次面の調査を実施している。VI区同様時代に応じた面ではなく、連続する遺構群の把握のために設定した作業上の確認面である。

### 1 1次面の調査

古墳時代後期から平安時代の遺構群を主とする。また、これらの遺構を覆うように方形ピット群が確認されている。なお、遺構分布が希薄な部分では古墳時代前～中期の遺構が検出され、各時代の遺構が層位的に連続していることが明らかである。

**方形ピット群** 調査区東半部に当たるN・2・3地点、S・2・3地点では、南北方向に明確な列をなして調査区全面に展開する方形ピット群が検出された。西側のN・1・S・1地点では良好な状態でこそ確認されなかったが、遺構を掘り込んで分布が確認され、本来は同様に展開したとみられる。覆土はいずれも黄褐色砂質土の単一層で、遺物の出土はない。なお、方形ピット群を掘り込む遺構は確認されず、最も新しい時期の所産と考えられる。

**中世** 出土遺物より確実に中世に比定される遺構はないが、他地区同様に井戸が中世まで使用されていた可能性は高いと考えられる。

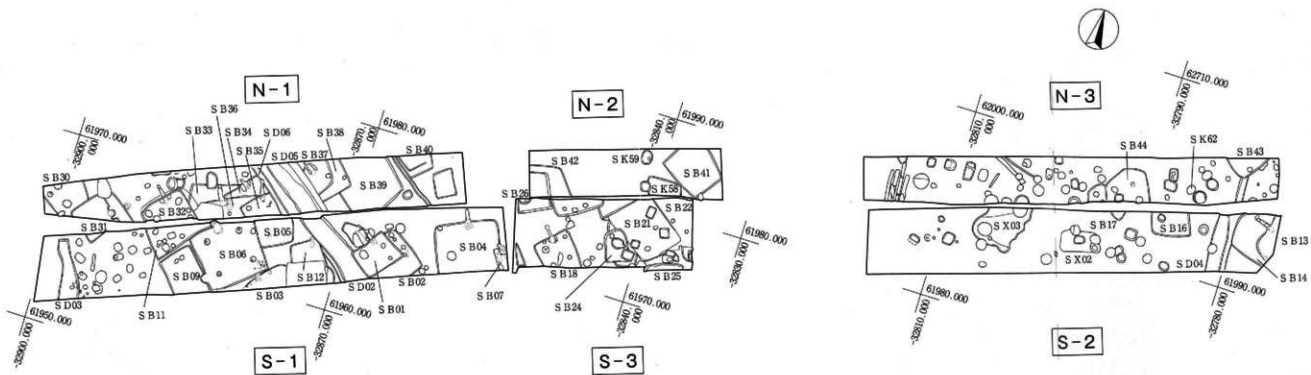
**奈良時代から平安時代** 平安時代はN・1・S・1地点で堅穴住居が2軒検出された。このほか、N・3・S・2地点で検出された土坑・溝も該期が多数を占めるとみられる。奈良時代はN・S・1地点、S・3地点ならびにN・2地点2次面で堅穴住居4軒ならびに溝1条ほか検出されている。住居群は調査区西側(N・1・2、S・1・3地点)にのみみられ、ほとんど重複せずに分布する。VI区から新幹線地点にかけての該期集落中心域とは土坑群の分布域を挟んで一定の間隔を置き、遺構密度も圧倒的に低くなる。集落構造の一端をよく示す点で注目される。

**古墳時代後期** 奈良・平安時代住居群がみられるN・S・1地点を中心に各地区に堅穴住居・土坑が分布する。新幹線地点ほどの遺構密集度はみられないが、VI区を含めて面的な広がりを見せ、該期集落の一角を占める。カマドはいずれも北西方向を向き、主軸を揃える。この主軸方向は基本的に奈良・平安時代に継承されており、住居密集の位置を含めて、集落構造の骨格が該期に形成された可能性が伺われる。

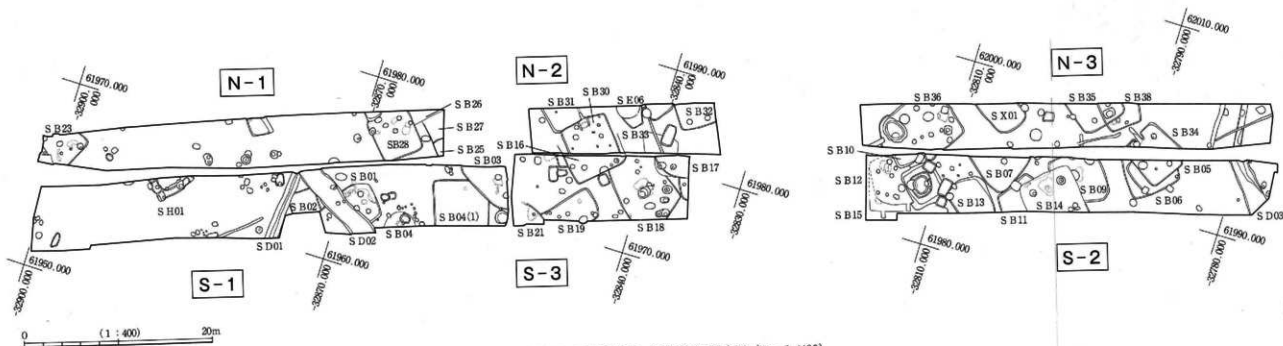
**古墳時代中期** N・1・2地点では古墳時代中期の堅穴住居・土坑が検出された。1次面の主体をなす古墳時代後期以降の遺構が存在しない箇所に限られ、後出土坑群が分布するN・3地点では2次面にて確認されている。堅穴住居群はほとんどが重複関係を有し、極めて狭い範囲に密集している。また、N・2地点では土器群が設置された土坑(SK58)が1基検出された。方形土坑内より破砕された土器群が石製模造品と多量の白玉を伴って出土している。概要は後述するが、検出されたN・2地点は堅穴住居がみられない箇所当たり、非常に象徴的である。



写真148 S-3地点方形ピット群



1次面



2次面

图172 Ⅱ区1次面・2次面遺構分布図 (S = 1/400)



写真149 N-1地点S B33·34·35·36



写真150 N-1地点S B34·35



写真151 N-1地点S B37·38



写真152 N-1地点S B32



写真153 S-1地点S B01



写真154 S-1地点S B06



写真155 S-1地点S B03



写真156 S-3地点S B18

地点名	遺構名	時代	発掘範囲		平面 形状	付属施設	埋込状況	埋藏品	備考	発掘年	土器等 調査枚	写真 枚数
			北	南								
N-1	SB01	平安	SB30		陥床 なし	カマド(北壁)	S-1 地点 SB104 同一 遺構	東側に先行遺構(住居跡か 管玉出土)あり	173	167		
S-1	SD03	古墳					N区では検出されず (SB30)により破壊	覆土中層より土器出土	173	193		
S-1	SK15	古墳			明確に確認されず		周部の土坑とともに孤立建築物を構成すると考えら れるが、明確なプランの把握はできず		173	190		
N-1	SB32	奈良			陥床 3	カマド(北壁)	S-1 地点 SB11 と同一 遺構 白玉1点出土	機瓦に接する部分は直下で壁 を確認	174	187	152	
N-1	SB33	古墳	SB32・34 SB36 SK32		硬化面 なし		白玉1点出土	部分的検出	174	186	149	
N-1	SB34	古墳	SB33	SB35・36 SD06	硬化面 赤検出	カマド(北壁) 石製支脚	SB36との重畳上層より 白玉・ガラス玉出土		174	188	140	150
N-1	SB35	古墳	SB34・36	SD06	陥床 1	カマド(北壁) 高杯が支脚上に正立	白玉1点出土	カマド前面に焼熟した石材や 土器片を含む機土・灰の二次 堆積が検出	174	189	149	150
N-1	SB36	古墳	SB33・34	SB35 SD06	硬化面 なし	カマド(北壁)	白玉1点出土	西面は機瓦により破壊	174	187	149	
N-1	SD06	奈良か	SB34・35					S-1 地点では検出されず	174	194		
N-1	SK51	古墳							174	190		
N-1	SK52	古墳	SB33						174	190		
S-1	SB09	古墳		SB06	陥床 1			機瓦により明確には検出され ず	174	183		
S-1	SB06	平安	SB3・5・9 SB35・36		陥床 4	カマド(北壁)	耳輪・白玉出土	南東側面にコノピア石状の石材 が多量に散見	174	182	154	
S-1	SB05	古墳~奈良		SB06	陥床 なし	床面上に機土	白玉出土	陥床の範囲や柱穴の検出状況 からは SB35 とは別遺構判断 される	174 175	182		
S-1	SB03	古墳		SB06	硬化面 なし	カマド(北壁)	床面上より炭化材・機 土・灰を検出	機瓦は SB06F で検出	174	183	155	
N-1	SB37	古墳	(SB38)	SD05	陥床 1	カマド(北壁)	石製機造品(筒形)1・ 支脚		175	188	151	
N-1	SB38	古墳	SB39	SD05 (SB37)	硬化面 なし		石製機造品(筒形)1・ 白玉3出土	床面レベル・遺物層ともに SB37 と同一で、同一住居の 可能性が高い	175	190	151	
N-1	SB39	古墳		SB38	硬化面 3		石製機造品(筒形)2・ 管玉1・白玉29出土		175	190		
N-1	SB40	古墳		SD07	陥床 未検出	東壁部から中央部に灰 分布	白玉6点出土	古墳(後葬)土器は SD07に 検出する可能性が高い	175	190		
N-1	SD05	奈良	SB37・38				管玉・白玉出土 S-1 地点 SD02 と同一 遺構	古墳時代遺物は SB37・38に 検出する可能性が高い	175	193		
S-1	SD02	奈良	SB02	SB01	平床		土玉出土 N-1 区 SD05 と同一遺 構		175	193 213		
S-1	SB12	古墳	SB08	SD02	陥床 なし	北壁に機土 (カマド残欠か)	土器は機土層より出土		175	184		
S-1	SB01	奈良	SB02 SD02		硬化面 2(不明)	カマド(北壁)	横溝西側に別の埋蔵があり、カマド脇の凹を考慮す るとカマド作り替えの可能性が想定される		175	182	153	
S-1	SB02	古墳		SB01 SD02	陥床 未検出	東壁部で機土検出 (カマド残欠か)			175	182		
S-1	Ph05	古墳							175	194		

地区名	遺跡名	時代	発掘調査		内容	付属施設	習知事項	調査	遺構目録番号	土器目録番号	写真番号
			発掘	調査							
S-1	SB04	古墳		SB07 SK01	船塚 なし	カマド(北壁) 石製瓦葺に築を遺構に 確認			176	183	
S-1	SB07	古墳	SB04		船塚 なし	カマドのみ確認	トレンチによる確認の結果、カマドが壊れたものと 判断されたが、構造は把握できなかった		176	183	
N-2	SD42	不明			船塚 なし		白玉4点出土	出土遺物には古墳時代と平安 時代が見られる	176	187	
S-3	SB36	不明		SB42	船塚状の礎石面 なし			N-2地点で検出されず、住居 跡の可能性低い	176	185	
S-3	SD18	奈良			礎石面 4	カマド(北壁)	銅鑊・管玉出土		176	186	156
S-3	SB19	不明			船塚 2(不明瞭)		白玉出土	N-2地点で検出されず、住居 跡の可能性低い	176		
S-3	SK34	奈良							176	190	
N-2	SD41	古墳		SB45	船塚 なし		白玉出土	住居跡である確率の低い 小型瓦葺土器はSK38からの 混入	177	187	
N-2	SK38	古墳		SB41	平皿・船塚 なし		多量の土器・玉・石製 模造品・鉄製品が出土		177	191 181	162 163 164
N-2	SK39	古墳							177	192	
S-3	SD22	古墳か		SD21	船塚 なし		SD21は赤色土に覆われ、ガラス玉等の遺物が出 土したため、包蔵番号を付して調査したが、明確な 根拠は得られなかった		177	185	
S-3	SD21	不明			礎石面 なし		白玉・ガラス玉・鉄鑊 等出土	礎石面の広がりからプランを想 定	177		
S-3	SD24	古墳	SB20・21	SK04 SK32	船塚 なし		甍土層より白玉・管 玉が土器とともに出土	住居ではなく、土坑	177	185	
S-3	SD25	不明			船塚 未検出	北壁にて礎土を検出	白玉1点出土	出土遺物は2次層SB18に帰 属するか	177	185	
S-2	SK02	弥生~古墳		SD08・13 SK22・25	不明瞭				179	194	
N-3	SD44	古墳			船塚 なし	床面上の礎土は2次層 SD34の礎石	白玉出土	住居跡の可能性は低い	180	190	
N-3	SD08	平安		SD43					180	194	
N-3	SK62	古墳							180	192	
S-2	SB16	古墳		SK19	船塚 なし		石製模造品片・白玉出 土	住居跡の可能性は低く、方形 土坑と考えられる	180	184	
S-2	SD17	古墳			船塚 なし			住居跡部を想定して調査したが、N-2区では検出さ れず、不整形土坑と考えられる。	180	184	
S-2	SD64	古墳			平皿		石製模造品(銅形)・ 白玉出土	N-2区では検出されず	180	183	
S-2	SB13	古墳	SB14		船塚 なし	カマド(北西壁)	高窓で高検出		180	185	
S-2	SD14	古墳		SB13	船塚 なし		白玉4点ならびに銅鑊 片が甍土層で出土		180	183	
S-2	SK01						方形ピット跡に落ちて検出された浅い窪みより遺 物が出土。遺構番号を付して調査を行ったが、包蔵 層中の遺物と判断される。			194	

表17 Ⅱ区1次面主要検出遺構一覧表

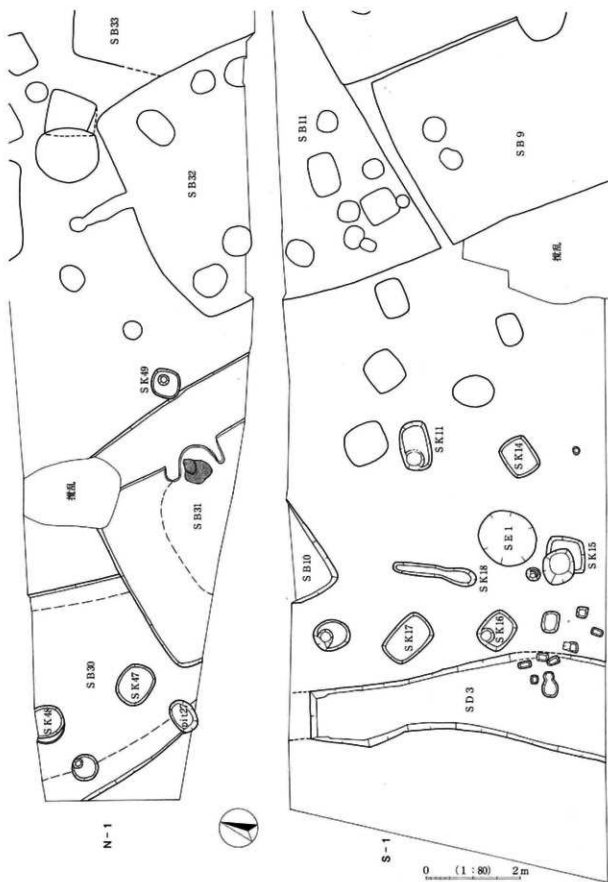


图173 VII区1次面遗物实测图① (S = 1/80)



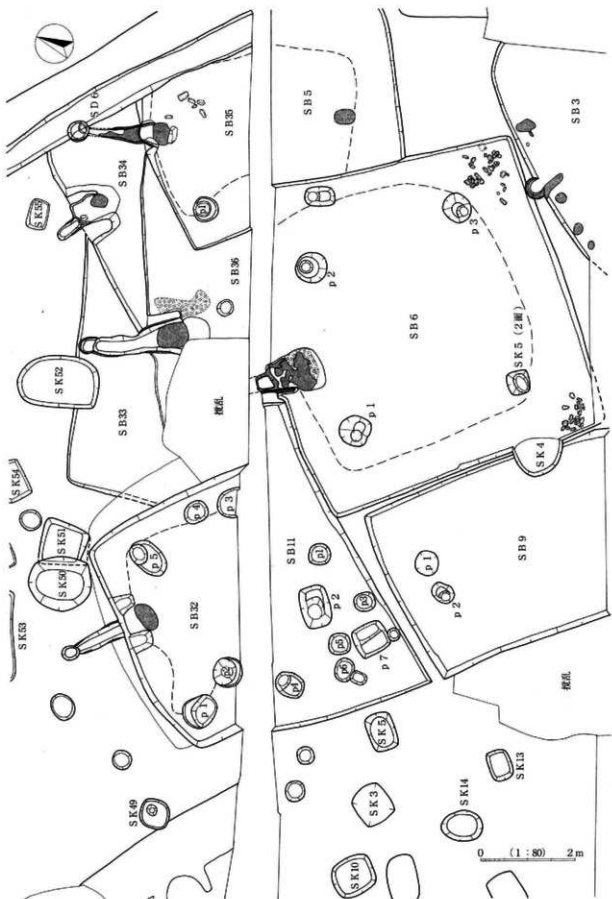


图174 VI区1次面遺構実測图② (S = 1/80)

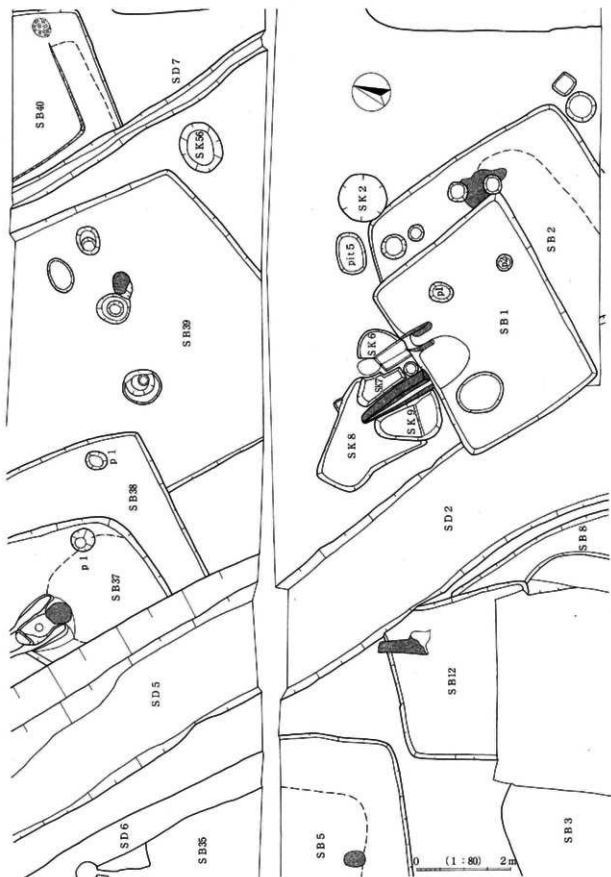


图175 Ⅱ区1次面遺構実測図③ (S = 1/80)

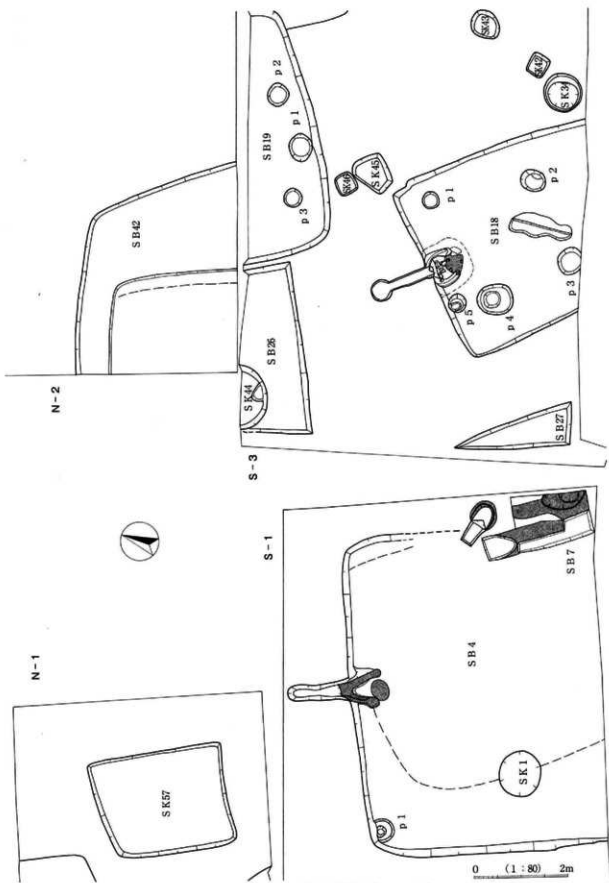


图176 VI区1次面遗構実測図④ (S = 1/80)

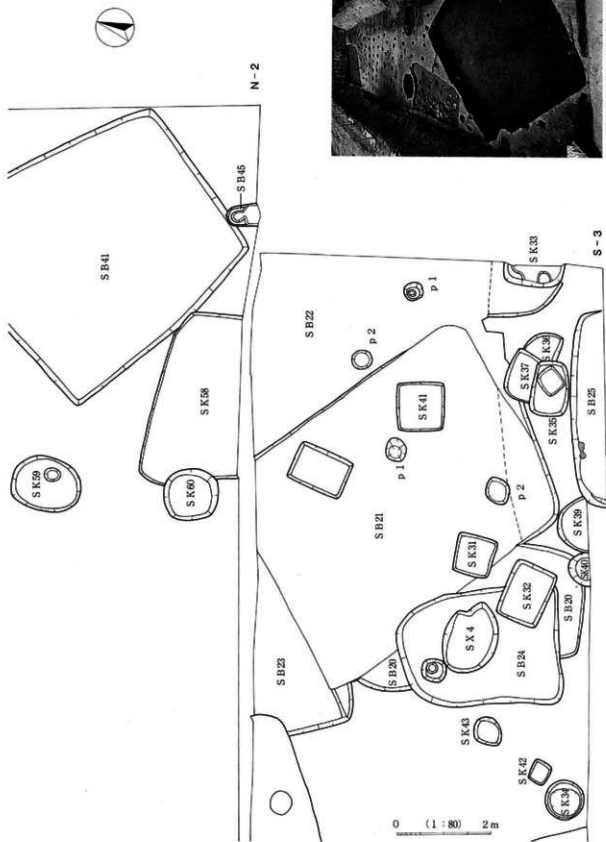


图177 VII区1次面遺構実測図⑤ (S = 1/80)

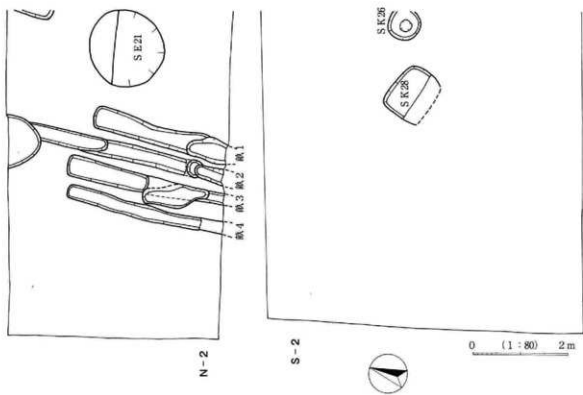


图178 W区1次面遗构实测图⑥ (S = 1/80)



写真159 S-1地点全景



写真161 S-3地点全景



写真158 N-1地点全景



写真160 S-2地点全景

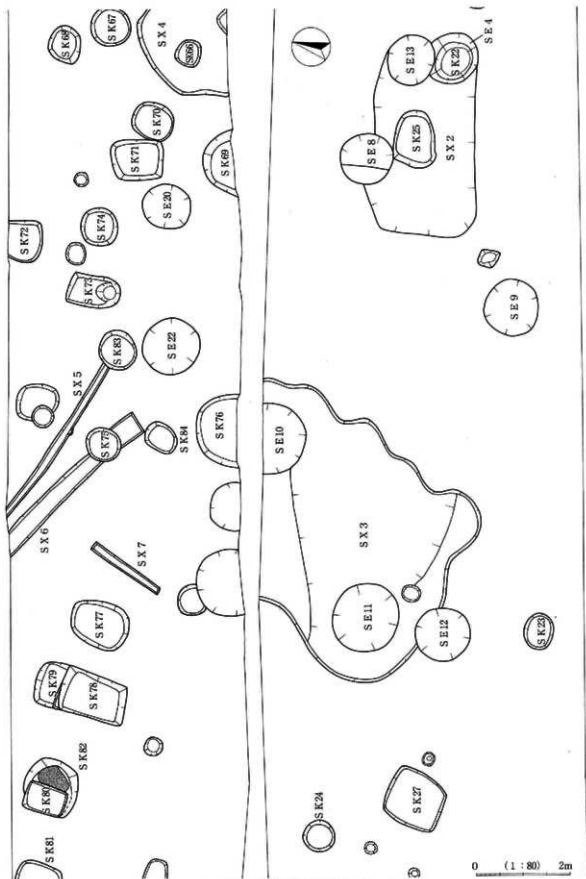


图179 VI区1次面遗构实测图② (S = 1/80)